

に就いては、いろいろの説明解釋があるのだが、私は主としてこれを一つの職業的の集團と見、多くの場合に於いて支配階級に奉仕するものと見、而かも甚だ屢々階級の中間に介在して、一種の不安定な、固定的でない、自由な立ち場を取るものであると見る。

文學者の如きは、いふまでもなく、イデオロギヤの統一組織を専らその社會的職能とするところの、一つの職業人であつて、文壇は、この種の職業的集團にほかならない。インテリゲンツィヤは、何れかの支配階級に奉仕するのではなくてはその存立を確保することが困難な事情を持つてゐるのであるが、同じインテリゲンツィヤでも、工場の技師とかいふ種類のものとは違つて、文學者は、甚だ屢々階級の中間に介在して、自由な立ち場を棄て切らず、支配階級へもあまりよく奉仕しないやうな關係に在る場合が多い。要するに固定的の性質を缺いてゐるところから、而かもイデオロギヤの組織統一の問題に密接な關係を持つてゐるところから、その間には非常に絶えず分合が行はれる。大體に於いては一定の階級の影響を受けてゐながら、その同じインテリゲンツィヤの間に争闘が行はれ、分裂が生ずる。イデオロギヤの方面の仕事であるから、その仲間同士の間の争闘が、思想上心理上の探求となつて現はれて来る。殊にその争闘の中から新らしい思想上心理上の創造的開拓者としての職能を充たして行くものは、自のづから一種の貴族的な氣風を持つやうになつて来る。自か

ら高しとするやうになる。一種の貴族的な隔離によつて、支配階級からの解放を得ようとする。少なくとも、それに反抗の態度を見せる。凡俗から超越し、習俗を打破しようとする。而してそれがインテリゲンツィヤの間でのイデオロギヤの争闘といふ形で行はれる。

この貴族的傾向、凡俗への反抗が、一面ではインテリゲンツィヤが狭い一種の特權團體でもあるやうに、だんだん自分たちだけの仲間のうちに立て籠らうとする傾向となつて現はれて来る。また一種の自惚れとなつて現はれて来る。それはインテリゲンツィヤのイデオロギヤとその社會生活上の實際との不一致が招き來たる歴史的の結果であると考へられてゐる。

日本に於ける自然主義文學は、インテリゲンツィヤのイデオロギヤの上での争闘として、重大な意義を持ち、ひろく影響を及ぼしてゐる。反習俗、偶像破壊、現實暴露の標語は、結局文學の上では、専ら個人の生活に於ける生理上心理上の斷片的な事實を重要視して、これを精細に叙寫するといふ形を取つて現はれて來たのであるが、その一方で、今までの社會的制約を破つて、一切の現實を暴露するところに、習俗打破のための少數の戦士といふやうな意識が伴ひ、自分たちを一種の精神上的の貴族として感ずるやうな心持ちを、自のづから作り上げて行つたのである。この事實は、今日に

至つても尙、文壇を構成するインテリゲンツィヤの間にその影響を絶たないばかりでなく、寧ろ今日に於いては、文壇といふインテリゲンツィヤの集團の中に在つては、特に何等の刺戟をも與へなければ、問題にもならない程度の、文壇的常識とさへなつてゐるのである。文學作品の上に、個人の生活に於ける生理上心理上の断片的な事實を重要視して細叙する風は勿論、文壇的インテリゲンツィヤの範圍では、およそ世間的習俗に拘はることを必要としない、一種の自由な特權的なものが認められてゐるといふことも、既に今さら言ふまでもない常識的の了解となつてゐるのである。しかもこれ等の無刺戟な常識的な了解が、今日に於いて無刺戟となり常識的なものとなるためには、相當の激しい戦ひを経て來たのである。自然主義の文學は、既に知られてゐる如く、ひろく當時の世間と闘ひ、更にまた内に在つては文壇の一部と闘はざるを得なかつたのである。その世間といひ、文壇の一部といふものは、要するに當時のインテリゲンツィヤの大多數にほかならない。

明治の文學が成立して以後、自然主義文學の運動は、文學上のイデオロギヤの大仕掛な争闘として、恐らくは最初のものであつたらう。従つて日本の新文學の歴史に、一つの重大な時期を劃したものであらう。現在の文壇は、一方その時期の連続ではあるが、それは既に最初の闘志を失つた下り坂の時期である。また當時のやうな闘志を必要としなくなつたほどに、その當時の論争の題目

となつたイデオロギヤの諸要點は認められ、安定を得て、殆ど何等の特別な刺戟をも與へない常識とさへなつてゐるのである。而かもまたその他の一方では、次に來たるべき轉換期が、漸くその準備に取りかゝつてゐるのである。

今日の純文學的作品といはれるものは、月刊の雑誌に出る短篇小説によつて、専ら代表せられてゐると言つて、大體間違ひあるまい。而してそれ等の夥しい短篇小説が、その殆ど大部分は、作者自身の日常生活の断片的な叙述の範圍を出でず、少なくともその種のもものが、殆ど一つの流行とも見えるほどに、或ひはまた心境小説などといふ名目さへ用ゐられてゐるほどに、小説の一つの新種目でもあるやうに、最近の小説の流風の最尖端に位するものとさへ見られてゐることも事實である。またそれに對して、作者の身邊雜事を叙述したものばかりが多く、而かもその中に包まれてゐるところの「心境」なるものも、さまで精到深拔なものでもないといつて、もうさういふ種類の小説には飽き飽きしたといふやうな批評のあることも事實である。通俗小説が、純文學的作品と對比せしめられるやうな心持ちから問題になつて來たのも、一つは、純文學的作品といふものに對する、上に言ふやうな飽き飽きした心理に出發してゐるところがあると見られる。いはゆる「本格小説」な

るものへの要求は、その心理の落ちつくところであらう。

現在の文壇が、自然主義文學運動時代のやうに、文壇の内外のインテリゲンツィヤを敵として争闘するといふ必要を失つてゐること、その當時の論争の題目となつたイデオロギヤの諸要點が、既にひろく認められ、安定して、殆ど何等の特別な刺戟を與へない常識とさへなつてゐること、これ等は上に述べた通りである。たとひ自然主義以後、文壇的インテリゲンツィヤの間に幾多の小分合があつたにしても、文壇は寧ろその間に著しく對世間的の地歩を固め、特殊なインテリゲンツィヤの社會的集團として、眞面目にその社會的位置を開拓確保して來たとやつてよい。而してまた、文壇的インテリゲンツィヤの間の幾多の小分合といふものも、これを自然主義文學運動の場合に於ける文壇的インテリゲンツィヤの分裂争闘に比べては、はるかに軽い意味のものであつたと言つてよい。而してこの文壇の内外に於ける安定は、自然に技巧方面の發達を促すやうになつたのである。

文壇的インテリゲンツィヤが、自からを一種の反習俗的な特權的な集團のやうに感じ勝ちな、貴族主義的な習慣もしくは惰性、自分たちの個人的生活が、何か特殊の意味もしくは興味を持ち得るといふやうな自惚れ、個人生活に於ける生理上心理上の斷片的な事實を重要視して細叙する手法、争闘的意志を必要としなくなつた文壇内外の安定の氣分、それに伴ふ技巧の洗煉、——これ等が相あ

つまり相助けて、文壇的な小説即ち純文學的作品の上に、今日のやうな多くの身邊雜事的「心境小説」を生産せしめるに至つたと見ることは、必ずしも不合理ではないであらう。そこに一貫して見ることの出来る心理的思想の特徴は、インテリゲンツィヤの自得的エゴイズムである。而してまたその表現の形式に對する敏感である。

通俗小説の讀者が、たとひ、多少の不自然や作爲があつても、複雑にして變化ある布置結構を好み、その統一せられた姿に於ける一つの「物語」を求める點に於いて、今も昔も變らないながら、常に時代の新しい興味をその作品のうちから見出ださうとし、外形上の生活では、時代の最新味を代表し、風俗の先頭に立つやうな要素の多からんことを求め、一面時代の新思想にも觸れながら、結局安全な妥協に落ち著き、危険なものゝ手前で際どく立ち止まることを豫期する種類のインテリゲンツィヤであると言へるなら、純文學的作品の讀者は、どういふ種類のインテリゲンツィヤであり得るだらうか。

この間に答へるためには、純文學的作品の作者である文壇人としてのインテリゲンツィヤの心理上思想上の傾向を見なければならぬ。

文壇的インテリゲンツィヤが、自からを一種の反習俗的な特權的な集團に屬するものゝやうに感じ勝ちであること、その集團に屬するかぎり、その範圍ではおよそ世間的の習俗に拘はることを必要としない一種の自由を享有してゐるかのやうな、自得的な、エゴイステックな貴族的傾向を何となく有してゐること、これ等は前に説いたところである。而してまた、純文學の創作に従事する文壇的インテリゲンツィヤは、いつでも時代の先頭に立ち、或ひはその先頭的位置に在る思想のために闘ひ(たとへば過去に於いては自然主義文學運動の場合の如く)、少なくともその先頭的な思想感情を表現してゐるものとして自から任ずる傾向を有してゐる。純文學的作品を中心とする文壇が、通俗小説をその圏外に置くのも、一方にはこの方面の心理上思想上の根據があると見られる。いはゆる純文學的作品が、もしくははその作者たる文壇インテリゲンツィヤが、いつでも時代の先頭的位置を占めてゐる思想感情の表白に参加してゐるかどうかは、勿論十分検討を要するのであるが、少なくとも、さういふ風の心持ちが、何となく自から高く持し高く任ずるやうな心持ちが、文壇的インテリゲンツィヤの間に惰性的習慣的に存在することは事實である。殊に、資本主義の發達とともに、ジ・ーナリズムも盛んになり、文學者の數も多くなり、その間の生存競争も激しくなり、文學が漸く商品化し、文壇が漸く明らかに一つの職業的集團としての性質を示して來るに伴つて、たとへば通俗小

説その他の一層多く商品化したものに對抗して、自から純文學的圏内に立てこもつて、これを守らうとするやうな傾きをも生ずる。一つのインテリゲンツィヤのうちの争ひの形とも見られよう。しかしながら、この場合では、内心の自由を失ふまいとして自から守る間に、だんだん狭い小さな専門家的なグループの中に立て籠つて、益々自得的なエゴイステックな一種の貴族的な傾向を助長して行くことにもなる。とにかく事實はさういふ傾向へ進みながらも、時代の尖端に立つ思想感情の表白が自分たちを除いては見られないといふやうな自任の心持ちだけは惰性的にあつて、さういふ心持ちはまた自のづから作品の上にも流出する。

何となく反習俗的であり、先頭的思想の匂ひがするといふことは、いつの時代に於いても、進歩的インテリゲンツィヤを以て自から任ずる人々にとつては、たしかに一種の興味であり得る。たとひそれは眞の先頭思想ではなく、單に多少の自由さや新らしみを帯びてゐるに過ぎないものでも、とにかくそれが何となく反習俗的な文壇的インテリゲンツィヤの個人的生活の記録であるといふことや、その作品が通俗的なものとして低く見られてゐるものとは、どこかその態度に手法に、題材の取捨に結構に、自由な自然な、何等の外部的拘束を受けてゐないところがあつて、それが純文學的作品として一層高級なものとして見られる所以であるといふやうなことや、これ等はとにかく、

個人生活(それも多くは作者自身の)の瑣末事を細叙すること以外にあまり多く出でない身邊雜事的「心境小説」がある程度まで讀者を持ち、従つて前にも言つたやうにやはり商品として、價值を可なり高く見られてゐる理由ではないであらうか。

言ふまでもなく、純文學的作品と見られてゐるものが、悉く身邊雜事的「心境小説」でもなければ、上に述べたところが、純文學的作品に對する讀者の興味のすべてであると言ふのでもない。またさういふ興味の持ち方が、文學の鑑賞として正しいか否かも勿論問題であり得る。しかし、身邊雜事的「心境小説」が、近來かやうに夥しく現はれ、またそれがともかくも世に行はれてゐるとすれば、讀者の側からの興味の中心が、文壇的インテリゲンツィヤの心理上乃至思想上の特徴に對するある種の同感であると見ても、必ずしも無理ではあるまい。

とにかく、純文學の作者である文壇的インテリゲンツィヤが、本來その表白者でなければならぬところの先頭的思想と必ずしも歩調を合はせ得なくなり、眞の意味での反習俗的精神とも遠ざかりながら、文學上最も進んだ高い位置に自分を置き、純文學の中心勢力として自から持するところに

——即ち前にも一寸言つたやうに、インテリゲンツィヤのイデオロギヤとその社會生活上の實際との不一致があるところに、その歴史的の結果として、インテリゲンツィヤは、ますます狭い自分の仲間うちに立て籠り、一種の自負心を高めて行くことになつて来る。言ひ換へれば、たゞ自分といふことのみ拘はり、自分の生活にしか興味を持ち得ないやうになつて来る。今の文壇は、ある程度までこの形勢に立つてゐるものと見られるであらう。(一五・三)

文學の讀者の問題

文學が一つの社會的現象であると言つたら、人は今さらのことだと言ふでもあらう。全く、われわれの考へたり書いたりすることの中には、遺憾ながら「今さらのこと」が少なくないやうに見える。しかしながら、その「今さら」らしく見えることに就いて、新らしく考へたり書いたりする必要が、存外少くないといふことをも、序でに世間の聰明な人たち（批評家と稱する人々をも含めて）に考へて見て貰ひたいのである。

文學が一つの社會的現象であるといふことに就いては、これまでに書かれたものも可なり多いやうである。藝術上の情緒が、結局一つの社會的情緒であつて、藝術家はそれによつて、われわれ自身のと近接類似の生活をわれわれに經驗せしめるといふこと、音響の律とか色彩の調和とかいふやうな快い感覺から與へられる直接の満足のほか、藝術家がわれわれの想像のうちに呼びあつて來るいろいろの存在の間に心を置き、それに同感する心持ちの起るに伴つて一種の満足が生ずるといふこと、——要するに、この藝術的情緒は本質に於いて社會的であつて、その結果として自づから個人の生活を擴大し、一層廣い共通普通の生活との融合に導くといふこと、藝術の窮極の目

的はこの社會的情緒の創造に在るといふこと、——これ等も既に説かれてゐるところである。また、藝術家の創造の心理の方面から觀察して、藝術家の根本的な特質を「共に苦しむ」力に在りとする説もある。この「共に苦しむ」力によつて、藝術家は自己の「我」の範圍を越えて他と融合することが出来るやうになる。この「共に苦しむ」力の助けによつて、藝術家の心は、無数の他の人類の感情を反映し、またそれに反響する。その力によつて藝術家の意識の音響が満たされる。それは時と隔たりとを短縮して、藝術家の前に過去と未來とを呼びさます。それによつて藝術家の心は極めて敏感な樂器となり、遠い遠い殆ど聞こえないほどの響きにも共鳴して振動する。それは藝術家の想像力に翼を與へ、それによつて焰の如くに燃え立つ。藝術創造の能力と重大な關係を持つところの想像力は、この「共に苦しむ」力と密接に結合してゐる。藝術家が社會のもしくはひろく人間生活の興味に對して呼應共鳴する力の鮮活であればあるほど、その藝術の力はそれだけ強くなる。ひろく人間生活の興味に對して呼應共鳴する力の鮮活な藝術のみが、眞によく多くの人々の心を動かし、廣い人生の視野をひらく。——この説もまた新らしいものではない。

更に、藝術上の事實の進化發達するあとを見ると、その様式によつておのづから集まつてそれぞれの群を成し、それぞれの流派を形づくつてゐる。これは時處を同じくすることもあれば、また必

ずしもさうでないこともある。とにかく何れにしてもその様式の持つてゐる集團的性質は見のがすことが出来ない。またあらゆる藝術は一定の公衆を豫想し、一定の文化の環境を條件とする。藝術上の作品の價值は、時代と環境とに従つて常に移動する。一定の公衆を豫想することなしに、藝術上の作品の價值を考へることは出来ない。藝術上の價值は自のづから一つの社會的の現象である。——かういふ考へも既に説いた人がある。

これ等の説明は、いづれも文學藝術の社會性を明らかにするための試みとして、或ひは今日では、既にありふれた考へのやうにさへもなつてゐるであらう。文學藝術が一つの社會的現象であることは、今日では常識だと言つてよい。もつとも時々氣まぐれな考へかたの人が出て来て、そしてそれは大抵「藝」とか「技巧」とかをそれだけで獨立した特別のもののやうに考へがちな人たちが、文學の社會性を否定するやうな一種の激語を放つたりすることもある。しかし、それ等とても、その眞意に於いては、ほんの一時の何かに興奮したあまりの言ひ分と見るべきものであつて、もはやこの一義については、根本の點では論はないものと見てよい。しかしこの一義は、いはゞ文藝論の肝要な一つの出发点であつて、この一義の徹底と不徹底との差が、重大な文藝論上の争ひを生むのである。この一義は決して軽く見るわけには行かない。要するに文學（こゝでは文學だけに就いて

論するつもりであるが)の社會性は、文學を享受する方面の事實から見て決定せられる。文學創作の方面の事實から見ると、作者自身は、或ひは「純粹な藝術」のための使徒として自分を考へ、文學の社會性といふやうなことは、てんで意識してゐないかも知れない。しかし、作品が出来上るとともに、それは作者の意識の如何に頓着なく、客觀的な價值の對象となるのである。即ち作品が出来上るとともに、それは一つの社會的現象となるのであつて、この事實は何としても否定することも無視することも出来ない。

文學が一つの社會的現象であることは、實際の場合としては作者自からもこれを認めてゐることが少なくないのである。ある思想とか理想とかを、ひろく讀者の間に普及浸潤せしめるために、意識して作者が文學を作つた場合は、必ずしもその點で有名になつてゐるロシア文學ばかりでなく、他の國の文學に於いても、いくらもその例を見出すことが出来る。功利的な傾向を明らかに追ふところの文學、いろいろの意味での宣傳文學教訓文學は、世界の文學史に少なくない。しかしながら、文學が社會性を持ち、一つの社會的現象であるといふのは、必ずしもそれが宣傳的、教訓的、功利的な傾向を追ふからではない。さういふ傾向の有る無しに拘らず、文學は一般に人間の生活感

情を統一組織する力を持つてゐるのである。文學が、一定の理想や觀念を讀者の間に普及浸潤せしめようなどといふ考へから全くかけ離れて、全く「藝術のための藝術」の主義にかなふものゝ如く判断せられる場合に於いても、やはりそれは人間の生活感情を統一組織する一つの力であつて、即ち社會性を持ち、一つの社會的現象として十分成り立つてゐるのである。

今までの文學研究や批評の上では、専ら作者のことばかり問題になつてゐる。作者が問題になるのに不思議はないのだが、作者ばかりが問題になつて、當然それとともに考へられなければならない讀者の問題が閑却せられて來たことは、いはゞ一つの不思議であつた。文學が社會的現象であることを認めるかぎり、作者の問題と併せて、讀者の問題が考へられなければならないのは言ふまでもないことである。これも言ふまでもないことだが、文學は一つの生活である。文學といふ一つの生活が成りたつためには、作者と讀者との双方がなくてはならない。讀者といふものの中には、普通の意味での一般の讀者は勿論、批評家、研究者などのすべてを包括してゐるものと考へなくてはならない。文學を社會的現象として考へる限り、この意味での讀者の問題を閑却することは許されない。文學の社會的交渉などは、文學以外の問題であるといふ風に考へ、それを一口に「讀者」の問題

であるとして閑却したやうな批評も、随分場合によつては行はれてゐたのである。しかしながら、讀者がなければ作者がなく、作者がなければ文學そのものも成り立たないといふ考へは、ある時代の象徴派の文學などに就いても説かれたことがある。即ち象徴を創造するところの主體と、その創造せられた象徴を享受するところの主體と、この二つのものをあはせて一つの全きものとして、それに対する關係から考へられるのではなくては、象徴主義文學の本質は到底論究することは出來ないとせられたのである。言ひ換へると、象徴主義の文學は、創作者と鑑賞者との兩者に對する文學上の作品の二重關係の中に成り立つのであるから、つまり鑑賞者がその作品を如何に享受するかといふことが、その作品を象徴的なものとするか否かを決定する條件になるのである。即ち讀者がなくては、その作品は象徴主義の作品とはならなくなり、象徴主義の詩人といふものも成り立たなくなる。何故かといふに、象徴主義は單なる創作行動ばかりでなく、創作的連帶行動だからである。更にまた、象徴主義は、創作するところの主體が、單に藝術的客觀化を行ふことではなく、藝術的客體を、創作的に主觀化することにほかならないからである。——象徴主義文學に就いてのこの考へかたは、單に象徴主義文學にのみ限らず、これをひろく一般の文學に推しひろめて云ふことが出來るであらう（一體文學そのものが、正しい意味での、デカダンの幻象的な意味を抜きにしての象徴だと言へ

るのだから、この場合に於ける象徴主義文學の解説が、一般の文學にひろく當てはめて考へられるといふことは、少しも不思議はないのである。即ち創作するところの主體が藝術的客觀化を行ふこと（作者の創造）と藝術的客體を創造的に主觀化すること（讀者の享受）と、この二つの方面の事實が、文學の批評と研究との上に必ずあはせて考察せられなければならないのである。作者の問題のほか、讀者の問題の考察がなくては社會的現象としての文學の考察は十分とは言へない。

しかしながら、讀者の問題の考察は決して容易でない。殊にこれまでの文學批評や研究が、この方面を閑却してゐたために、尙更この問題についての手がかりが少ないやうに思はれる。またそれ等の事情の如何に拘らず、この題目そのものが面倒であつて、正確な説明をこれに與へることは容易の仕事ではあるまい。それかと言つて、この問題がつまらないといふことにならないのは勿論である。

作者を中心として考へると、その作者が一定の讀者を持つといふことは、その作者と讀者との間に、何等か近親類似の生活内容が存在してゐるといふことを意味する。一人の讀者なり、ある範圍の多數の讀者なり、またはひろく一國の一時代の讀者公衆が、ある作者に牽きつけられるといふこ

とは、その作者なりその作品なりが、それ等の讀者の生活興味を表現する役目を勤めてゐることを意味する。讀者の作者に對する態度のうちには、讀者の生活の本質と組織的な關係を持つてゐるところの好尚趣味が、知らず識らず現はれてゐるのであつて、讀者の心理は、そこから推定することが出来るのである。文學がある時代のある國民の生活の表現であると言はれるのは、それがその時代の國民の中から生れたからといふばかりでなく、寧ろその文學が、その時代の國民から受け入れられ、承認せられて、それによつてその國民が一種の満足とよろこびとを感じたからであると言へるのである。かういふ解釋に對しては、その作者（もしくは作品）に對する時代の社會的環境の影響を、軽く見てはいけないといふ批評が加へられる。それに實際の研究となつても、ある作者の人氣の程度といふやうなものは、その作品の印刷部数とか賣れ行きとか、原稿料とかいふやうなものから推定することはなかなか困難でもあり、危険でもある上に、それ等の知識材料を得るだけのことさへ實は容易ではあるまい。或ひはまた、その時代の讀者公衆の思想傾向とか趣味好尚とか、文學もしくは文學者といふものに對する態度といふやうなことから、讀者の心理を知らうとする説もある。文學上の作品の成功とか影響とかいふ方面から見て、この二つが必ずしも一致せず、影響といはれるものの中にも、文學以内でのものと、社會に及ぼすものとの二つがあるとして、その社會に

及ぼした影響——作品が播布普及せられて行く間に、どういふ階級に對して専らその力を及ぼして行つたかといふ點を重大視する見かたもある。

更にまた、様式の歴史と趣味の歴史との二つの方面からこの問題を考察しようとするものもある。創作する主體の立ち場から見て、時代の精神と作品との交渉に重きを置く場合には様式の歴史が成り立ち、享受する公衆の側から見て、文學の發達の上に生産と消費との相互關係を認める場合には趣味の歴史が成り立つ。その時代の讀者の特に好んで讀んだものは何であつたか、如何なる趣味がその時代を支配してゐたか、如何なる内容と形式とが殊に好まれたか、一定の批評上の規準ともいふべきものは如何にして成り立つたか、その批評上の規準は眞に正當な作品の評價に役立つたか、或ひはその評價はある作品を實價以下に見、ある作品を實價以上に見たやうなことはなかつたか、文學上の讀者もしくはその傾向の追隨者は如何なる社會上の位置身分を有してゐたか、およそこれ等の諸點を検討することによつて、作者の讀者公衆に對する影響と、讀者公衆の趣味好尚とを知らうとするのが、この方法の結局の目的である。

一體文學史といふものは作者の歴史であるとともに讀者の歴史でもなければならぬ。讀者公衆のない文學上の生産は考へられない。それだけのことは分り切つてゐるのだが、實際さういふ原則

から文學の發達を研究したものはあまり無いのである。第一に讀者の聲といふものを考へて見なくては、ある時代の多くの作品の中から何をを選んで來て研究するかといふ判斷さへ立たないことになる。讀者の意識が如何に作品を選んだりその價值を生かし顯はすために重要缺くべからざるものであるかといふ考へが、もつと實際の研究の上にはあらはれて來なければならぬ。而してその讀者といふ中には、同じく作者であるところのものをも含んでゐることを忘れてはならない。即ちこの種類の讀者は専ら文學上の影響を受ける讀者である。

讀者の問題は、讀者が文學に影響を與へる場合と、文學が讀者に影響を與へる場合との二つに分けて見ることが出来るが、しかしこの二つのものを嚴密に區別することは困難である。讀者が文學に對して消費者としての要求註文を持ち出すと見える場合にも、その讀者の要求註文の性質や方向を決定するものは、いろいろの複雑な社會生活上の原因である。文學が讀者に影響を與へると見える場合にも、その影響を受ける讀者の方の心理状態によつてその結果が動いて來る。而してその讀者の心理状態といふものはやはりいろいろの複雑な社會生活上の原因によつて決定せられるのである。讀者の要求註文に應じて作者が書くといふ風に考へられてゐる場合でも、實際は、作者がその

時代のある社會の心理状態もしくは生活状態を鮮やかに表出することによつて、その心理乃至生活状態を統一してこれにある新らしい生命が附與せられ、その力が讀者の間に一層鮮やかな形で擴がつて行くのに過ぎない。言ひかへれば、作者は讀者の要求註文に應じてゐるやうで、實はその讀者公衆の社會が自分自身の姿や心理を一層鮮やかに見せつけられてゐる形だとも言へる。このことは、文學が讀者に影響を與へると考へられてゐる場合に於いても同じやうである。文學が讀者の生活にいろいろの點から影響感化を與へるといふことは、昔からどの國でも度々言はれることであつて、心中や厭世自殺も文學の感化影響だと言はれたりするのであるが、さういふ場合に於いても、文學は別に自分獨りで考へ出した事を書いたわけではなく、實はその讀者公衆の社會が、自分自身の姿や心理をその文學によつて一層鮮やかに見せつけられてゐる形に過ぎないと言へるのである。

文學の影響は、必ずしも一國の同時代の間には限らず、時代を異にし處を異にしても生ずる。時代を異にし處を異にして尙且つ讀者が在るからである。文學の永遠性として考へられ名づけられてゐるものも、つまりはこの意味の讀者の存在を認めることにほかならない。文學が生き延びて行くといふのは、文學が時や處を異にして讀者を持つことである。たとへば一國の文學が他の國の文學

に影響を與へるといふ場合には、即ち一國の文學が他の國で讀者を見出だし、その讀者を強く牽きつけるといふ場合には、この二つの國に於ける社會的關係の間に、何等かの類似が存在してゐなければならぬ。この類似の程度と、文學の影響の程度とは正比例する。この類似が全く見出だされない場合には、文學の影響といふ結果に到達するほどの意味での讀者はあり得ない。學者のあげてゐる例によると、アフリカの土人は今日に至るまでヨーロッパ文學の影響を少しも受けてゐない。それからまた、一方の國民が文化の進歩に於いて相手の國民よりも後れてゐる場合には、その關係は片務的であつて、文學上の影響は後れてゐる方ばかりが受けることになる。ロシア文學は十八世紀のフランス文學からいろいろの影響を受けたが、ロシア文學からの影響はその時代のフランス文學へは及ばなかつたのである。社會的關係の状態が類似してゐて、文化の程度もほど相如くやうな場合には、相互の影響が行はれる。イギリスとフランスとの文學の關係の如きがそれであると考へられてゐる。外國文學の影響は、全く偶然の事情から防ぎ止められてゐたり流れ込んで來たりすることもあるのだが、双方相知る機會のないところからその影響が及ばないといふやうな事情を別として見れば、ほど上のやうなことが言へるであらう。日本で自然主義文學の興つた當時、これに反對する學者や批評家の多くは、中には相當物識りの人もゐたのであるが、その文學が遠いフランスで

何十年前とかに行はれたものであるとして、これを無意味無根據な運動であるかの如くに言つたのである。あの當時に現はれた自然主義文學の作者は、實際文字通りの意味でフランスやロシアの自然主義もしくはリヤリズムの作品の熱心な讀者であつた。その讀み方がどうであつたにしても、その作品の多くに外國文學の模倣があつたにしても、あの文學運動を生んだ日露戦争前後の日本は、その社會的關係の狀態に於いて、たしかに一つの轉回期に立つてゐたのである。

讀者の問題は、外國文學の影響の問題にも當然觸れ及ばなければならぬ。

社會的關係の類似が、外國文學の影響を可能ならしめるといふことは、讀者の住む社會の社會的關係と、作品の生れる社會の社會的關係とが、類似近接してゐる場合に於いて、讀者と作品との交渉が成り立つといふことを意味するものである。随つて、一國の社會的關係に急激な變動を生じた場合には、今までその社會で成り立つてゐた文學は、その急激な社會的關係の變動に適應隨伴するために苦悶する。もしくはさうすることを拒絶して、社會的關係の變動の方向に反かうとする。今までその社會で成り立つてゐた文學は、その心理上思想上の脚場がぐらつき、その不安定からいろいろの形で動搖する。ロシア革命に伴ふ新舊文學の混亂分裂が最も鮮やかなその最近の一例である。

る。ロシアの國外移住文學者は、社會的關係の急激な變動に對して、殆ど全く反對の方向に向はうとするか、少なくとも、もとのまゝの立ち場に踏み止まらうとするものである。いはゆる「革命の道づれ」は、その變動の方向に隨伴して行かうとするものである。何れにしても、文學と讀者との關係が、社會的關係の急激な變動につれて激變する場合の現象にほかならない。

而してかういふ場合に於いては、文學と社會との關係がいろいろの點から新らしく考へ直され、それにつれて、新文化の建設の問題と關聯して、新しい文學と前時代の文學とのつながりの問題が起こつて来る。即ち文學上の遺産繼承の問題である。一方では、前時代の文學とは何から何まで絶縁して全く新しいものを作り出さなければならぬといふやうな急激な主張が行はれる。それに對して、新しい文學が、過去の文學から多くのものを批評的な態度で活用すべきだと説かれる。社會的關係の急激な變動に伴つては、文學の上にかういふ論争が生じがちである。

社會的關係の急激な變動は、要するに全く新しい社會生活を創造しようといふ意氣込みで行はれるのであるから、ひろい社會生活の建設創造といふことが、あらゆる場合の第一の關心事になつて来る。即ち文學の方面では、實際の社會生活を文學よりも高く重く見る考へが勿論強い。人生の

ための文學だといふ心持ちが強く支配する。文學はその新社會生活建設のために役立つ一つの手段として見られる。文學は新社會生活の建設が成就するとともに用なくなるものだといふ風にさへ考へられる。ロシアの未來派のうちでもコム・フートイといはれてゐる共產主義的未來派の考へかたなどがそれである。一種の文學自殺説であると言つていゝ。かういふパラドキシカルな考へかたは、文學が極端に社會奉仕のためのものとして考へられるやうな場合によく出て来る。批評の方面でも、批評力がすべての讀者に行きわたつて來ると、批評といふものは自然消滅すべきものだといふやうに考へられたりするのである。つまり生活そのものが藝術となるとともに、藝術は自然に消滅するといふのであつて、この點から見るとワイルドの考へなども一つの藝術自殺説の方向をとつてゐると言へる。而して一種の極端な藝術利用説だとも見える。この考へかたは、要するに藝術が未來の理想世界——社會主義の隈なく實現せられた世界でどういふ意義を持つかといふ問題に歸着する。

文學批評家が、最も賢い讀者でなければならぬことは、これまでも度々言はれて來た。文學の價値の問題が、讀者の意識によつて決定せられる以上、讀者の問題はなかなか重大であるのだが、

しかし讀者の意識といふものは、前からも言ふやうに、これを明確にすることは非常な困難である。そこで批評家は、讀者の代表者として、また代辯者として、自然にその任務を果たさなければならぬ立ち場にある。讀者としての批評家が文學研究の重要な題目となるのは、この意味から考へられなければならない。あらゆる意味での批評のない文學の存在といふことは考へられないし、また殆ど批評のない文學といふものは、實に寂しい感じのするものであらねばならぬ。

文學の讀者の問題は、文學を社會及びその發達と結びつけて考へるところに、起こらなければならぬものである。文學を専ら内在的に批評研究する間は、この問題は起こらない。文學を社會及びその發達と、原因結果の關係に於いて考案するところから、この問題は現はれて來るのである。この一篇は、この問題の考察のための下書きである。(一五・四)

文壇黨派の分合

身邊の雑事を書くのが必ずしもいけないのではない。その身邊雑事に對する氣にしやう、心が、りの姿が問題である。身邊雑事に對する心持ちの上の統一のしかた、觀かたが自得的であつて、自分の身邊の雑事なら、すべておもしろいだらうといふやうな態度のある點がいけないのである。文壇といふ一種の特殊なインテリゲンツィヤの集團内で、小さな自分の殻の中に立てこもつていゝ氣になつてゐるやうなところのあるのがいけないのである。

文壇の仲間のうちだけに——もしくはその文壇といふインテリゲンツィヤの小集團を何か特殊な世界のやうに思つて物珍らしがる讀者の間だけに、ともかくも默解せられる程度の興味の水準に達してゐることに安心して、生活の意志の展開が始まりさうにも見えないのがいけないのである。

つくり事らしいところのないのは、取り柄である。そしてそれは自然主義文學以來今日へ傳へられて來たところの、おそらくは唯一の共通の遺産である。

人生への大きな呼びかけの心が無い。目的がない。意志がない。

今日ではもうその役目を果たしてしまつたけれども、自然主義文學にはともかくも人生に向つて呼びかける心があつた。目的があり、意志があつた。プロレタリア文學にもこの人生へ呼びかける

心がある。プロレタリア文學が成立するものなら、それは人生に向つて熱烈に呼びかける心から生れた文學だからである。

プロレタリア文學運動の頓挫は、文學そのものの側からいふと、作品や評論に有力なものが出なかつたことによるし、文學以外の事情からいふと、一般の反動的情勢と、その文學運動の性質上、戦ひはひろく社會的規模の上に立つべきであつて、而かもその機を熟してゐなかつたことによるのである。あの當時は、文學と社會との關係交渉についてさへ、今日ほどに理解も成り立つてゐなかつたやうであるし、プロレタリア文學論それ自身がまだ一向整頓せられてゐなくて、階級文學の性質さへ一般に分つてゐなかつたのである。創作の方面でも、現實生活に對する藝術的統一力の不足が、今日まで大した進歩もせずに行かぬやうな有様である。孰れにしても、プロレタリア文學運動は、あの當時のまゝで進行して行かう筈はなかつたのである。しかしとにかくあの文學運動が、一つの思想的背景を有する文學運動——文學思想運動であることは云ふ迄もなく、没原理的な文壇の集團分裂——黨派の間に、一つの鮮明な原理的集團結束を作り出した形になつたことは事實である。

インテリゲンツィヤの集團結束が、或ひは教養の種類や程度により、或ひは利害の一致により、

或ひは主義主張によつて分合するのは、普通の事實であつて怪しむに足りない。今の文壇の黨派といふものも、何等かの意味でこれ等の分合の原則の一つもしくは二つ以上によつて結びついてゐるものに相違あるまいが、その中で存外根強くこの分合を支配してゐたのは、出身學校による區別である。三田出身だとか赤門出身だとか早稻田出身だとかいふことがなかなか外部では思ひもよらないほどに、何かにつけて文壇人の意識についてまはつて來たやうである。これは教養の種類による分合として、また従つてある程度までは利害の一致による分合として自然な結果であらうが、かういふ分合も今日では以前ほどに確定的なものではなくなりつゝある。教養の種類や程度の異同といふことも、すべてが全く同じになることはないとしても、以前に比べると大分その差が少なくなりつゝある。教育が劃一的な制度の下で行はれ、上記の諸學園が同一の制度の下に立つやうになつた今日では、それぞれの特色が以前よりはるかにその著しさを弱めて行くこともやむを得ない。それに文壇での黨派といふものは、本來出身學校が同じだといふだけの理由からでなく、主として主義主張の上から分合せらるべきものであり、またこの原則による分合が、最も合理的な有力なものであるべき筈である。今までの文壇が、あまりにこの原則を輕んじて、單に出身學校の異同にのみよつて専ら分合する傾向を有し、自他ともにこれを深くも怪しまなかつたばかりか、出身學校が同一で

あれば必ず一つにまとまらなくてはならないものやうに思つたりして來たことは、一方から言へば無理な話である。もとより出身學校が同じであることは、自然に情誼の上で親しみもあり、何かにつけて利害の一致を見ることもあるであらうが、それと文學上の主張とは必ずしも一致しない。勿論人間の集團の分合を支配する原則は、事實に於いてはなかなか微妙な複雑なはたらき方をするものであるから、簡単な理窟ばかりでは行つてゐないし、またそこに集團分合の事實の強みもおもしろみもあるのだが、とにかく今の文壇に就いて見ると、出身學校の異同だけで簡単に分合を決定する状態は漸く崩れかゝつてゐるが、その一方で文學上の主張による分合といふものも、まだ明快に行はれるところまでは行つてゐない。將來の文壇の黨派の分合は、結局主としては文學上の主張によるものでなくてはならない。しかしそこまで行くためには、日本の文壇ばかりでなく、日本の社會全體が、今日よりもつと社會集團生活上の合理的な訓練を経て來なくてはならない。

日本の政黨といふものを見ても、本當の意味での政黨は、わづかに生れたばかりの労働農民黨よりほかにはないと言つていゝ。その他の政黨と僭稱するものは、張三李四、悉く利害と情誼によつて(多くの場合利害の問題から情誼をも無視して)分合する集團に過ぎないではないか。

自然主義文學運動は、ともかくも文壇に主張による集團結束を作つたものである。プロレタリア

文學運動もまた、それに次いで、主張による黨派の分合を支配する一つの有力な原則を提供するものとならなければならない。

文壇の範囲内で、多くの人々が、ともかくも黙解せられる程度の興味の水準に達してゐることに安心してゐる場合、新しい文學上の主張による新しい集團結束は、安定せるものへの一つの脅威である。

自然主義文學運動も、一つの新しい文學上の主張による新しい集團の力として、その當時の文壇の安定を破つたものである。プロレタリア文學運動もまた、一つの新しい文學上の主張による新しい集團の力として、將來の文壇の安定を破るべき性質を有するものであるとするのは、果たして不當な觀察であらうか。

文壇の安定を破つて、新しい文學上の主張による新しい集團の力の現はれて來るといふことは、單に出身學校が同じであるとか、目前の利害が共通だとかいふやうなことだけでは、決して發生し得ない現象である。寧ろ文壇の黨派といふやうなものが、さういふ原則によつて主としてその分合を支配せられてゐることが長びけば長びくほど、また、さういふ原則の文壇の黨派の分合に對

する支配力が根強ければ根強いほど、それだけ新しい集團の力の出現を邪魔することになるのである。

安定した文壇では、作品でも評論でもその仲間のうちの同類のインテリゲンツィヤに向つて黙解を求めようとするやうな傾きが著しい。一種の専門家乃至くろうと仲間への呼びかけである。

新らしくあらはれて來る集團の力は、いつでも安心して呼びかけることの出來るやうな自分の相手としての仲間といふものを安定的に所有してゐない。彼等はまづひろく人生に向つて呼びかける。社會民衆に向つて呼びかける。

文壇が一つの専門家乃至くろうと仲間であつて、文學上の原則による集團的對立を意識しないですむ場合、その仲間うちの小集團の分合は、出身學校だとか目前の利害だとかで支配せられる。

文學上の原則による新集團の力の擡頭發生が、全く別種の集團的對立感を刺戟する場合に、文壇の小集團の分合は、出身學校だとか目前の利害だとかいふことだけでは支配せられなくなつて來る。今までの文壇に於ける集團の分合の形が亂れて來る。分合は出身學校の異同などばかりでは行はれにくくなる。情誼だけの關係からでは行はれなくなる。情誼を結ばしめるものが別に見出されて來る。新文學上の原則が階級的色彩を帯びてゐる場合、これに刺戟せられる集團の分合も、彼等自身

は無意識であるにしても、おのづから、階級的特色を反映し對照せしめて來る、今の文壇にはほゞこの情勢を見ると言つていい。この情勢についての具體的な説明はこの短文では盡くせない。

(一五・五)

批評的精神の問題

プロレタリアート藝術の問題も、また觀念上の遊戯になつて行きさうな様子が見える。この問題の性質もしくは問題發生の動機が忘れられかけて來たからである。それを忘れて問題に口出しをする人が多くなつて來たからである。

藝術の上にブルジョワジーとかプロレタリアートとかいふ言葉が用ゐられて來たのは、その根本の動機は今の文壇を非難するところに在つた。今の中んづく小説壇の小市井人氣質、妥協的、倫安的氣風を難する意味からであつた。少くとも私の意味はそこに在つた（大正九年一月『大觀』所載、「中間階級の文學」）。プロレタリアートの文學を要望する二三の人々の主張も、現在の文學殊に小説壇の氣風を排斥し非難するところに出發して、更にひろく藝術の自由解放を求めるの意に外ならないものと見られる。要するにこの非難は、以前にも言つた如く、眞によきものを世にあらはしめるための非難である。わるく寛大で、わるくお互ひに寛恕しあふやうな、日なた水くさい文壇の社會的空氣もしくは集團的意識に對する非難に出發した立言に外ならない。生命の源に就かうとする焦燥の心を失ひ切つたやうなものに對して、新しい眞實への鋭敏な愛の焦慮を感じはじめたものの抗議であり、批評である。要するに現在の没批評精神的な氣風に對する批評的精神の抗議であり、主

張である。この根本の動機を忘れてこの問題を考へたり取扱つたりするところから、いろいろの錯誤と空論が生ずる。

藝術に階級の區別はないといふ議論の如きも、その主張の細かいところは人によつて一つでないでもあらうが、要するに具體的な藝術といふものを離れて考へるところから來る思ひちがひである。個々のartを見ないで、Artを頭の中にまつり上げての考へかたである。而してたまたまそれが個の現在の藝術を眼中から逸するところから、現在の事實に對する批評を撥無してしまふことになる。凡そArtに階級の區別はないといふことから、直ちに眼前の藝術が、個々のArtがすべて階級差別もしくはその他の制限から自由なもの、全く解放せられてゐるといふ風に考へなければならなくなる。そこで現在の藝術上の事實に對する批評は無用になつて來る。つまり現状非打破、現状満足といふことを、暗黙のうちには認めることになつて來る。藝術に階級の差別のないといふ論は、期せずして現在の小市井人氣質の小説をさへ是認する結果になる。現在のArtをArtと見ようとすることになる。ブルジョワジー氣質の中から生れてゐる現在の文學をも庇護することになる。

現在の文學は一種のデカダンスに陥つてゐる。都雅がその重大な特色である。智巧的で、多少の

リリズムがあつて、多少の憂鬱があつて、ある程度までの、——根本までは揺がせないまでのモ
ーラリティーがある。都會人らしい安全第一欲も隨處に現はれてゐる。大抵の人々が唯美派的であ
る。而かもどこか卑俗な唯美派といふ調子をさへ有してゐる。たとへばその一代表は久保田万太郎
君の如きでもあらう。その他にもいくらもあるが、卑俗な唯美派としてでも、ともかく本ものであ
るといふ點で久保田君などが先づ念頭に浮ぶ。その他には模倣やにせものさへ少くない。

デカダンス時代はいつも唯美派的傾向を伴ふやうである。今の日本の文學もごみごみしてゐなが
ら、卑俗ながら、或ひは田舎ものが都會人の都雅を眞似してゐる醜さをかしさはありながら、とに
かく唯美派的傾向を有してゐる。革命期前の文學にふさはしいと言へば言へる。たゞそれにしては
少し淡々しい。文學上の革命もまだ急には行はれないかも知れない。

藝術そのものの上で新らしいものが要求せられるといふ意味と、社會的變動に處するインテリゲ
ンツィヤの態度もしくは關係といふやうな問題と、この二つが、階級藝術論に關聯して考へられ論ぜ
られようとしつゝある。この二つの問題は、インテリゲンツィヤが、この場合文學者であるといふ上か
ら見て、自然に關聯して考へられずにはゐないものであらうが、問題の内容がこの二つに自のづか

ら分れて來るといふことも忘れてはならない。少くとも今の場合、現在の文學に對する批評は、眼
前の事實である。社會的變動とインテリゲンツィヤとの關係の問題が現在の事實の問題でないといふ
のではないが、そのために眼前の事實であり、論の出發點であつた現在の文學に對する批評が取
り落とされてしまふことは、やゝ漁夫の利を得しめるやうな形になる。而してインテリゲンツィヤの
問題は、恐らく同じインテリゲンツィヤの間の内争分裂を早めることになるであらう。實際それは已
むを得ないことである。また自然なことである。もとを洗へば同じブルジョワジイの家に育ち、その
教育を受け、その習慣で生きてゐる人間でもあらう。また今のブルジョワジイに間接直接に役立つて
(心からか心ならずもかはともかく)生きてゐることにも大差ないであらう。しかし、それだからお
前も同じだとは言はせないものがある。それは各人の選擇する方向だ。これから行かうとする方向
だ。それだけは同じには行かない。自己否定か自己肯定かは別れて來る。現在の否定か肯定かは別
れて來る。それは要するに批評的精神の問題である。(一一・三)

文壇の反動思潮

自然主義文學運動の當時にも、これに反対する人たちの間からは、そんなものは何十年前前にフランスで流行したもので、今日では流行おくれだなどと言はれたものであつた。

かういふ言ひぐさは、時代の反動的要素がいつでも擔ぎ出すきまり文句のやうである。フランスで何十年前に起こつた一つの傾向が、日本で何十年か後にあらはれて來るといふことは、日本の生活の歴史的経過が自然に要求した結果であつて、そこにはそれを促すだけの社會的原因事情が出來てゐたのである。ほど同一の社會的原因事情が成り立つにつれて、ほど同一の文學上の傾向もまたあらはれて來るのである。同一の文學上の傾向が、國を異にするに従つて——言ひかへればその社會的原因事情を異にするに従つて、自然に時を前後してあらはれて來るといふことは、少しも不思議なことではない。文學の歴史的経過を社會的事情から説明して行けば、十分理解の出來ることである。フランスで何十年前に流行したから、今の日本に起こる理由もなく意味もないと考へるなどは、この歴史的経過に對する解釋のないことを示すに過ぎない。而してそれは、自然に無意識に、往くべき流れをせき止めようとする反動的な心持ちに裏づけられてゐるのである。

これは文壇の反動思潮の一つのあらはれである。

文學の社會學的方法論に對する漠然たる非難のうちにも、そんなものはとくの昔文壇の常識になつてゐるなどといふのがある。テーヌ以來の常識だなどともいふ。なるほど、文學が環境の支配を受けるものだといふくらゐのことだけなら、さうでもあらう。文學は社會的現象だなどといふだけのことなら——それ等の結論的な言ひぐさだけなら、常識だといふのに無理はない。しかし今日の問題は、今さらそんな漠然たる断定や結論だけで安心してゐられなくなつたところに在る。常識となつてゐるのは、ほんのそれ等の結論的な漠然たる断定だけである。鵜呑みにしたやうな教科書的知識だけのことである。たとへば文學と環境との關係に就いて見ても、その環境の勢力といふものに就いては、まだまだ十分に精細な考察を試みなければならないのであつて、これを實際上の文學批評に持つて來れば、重要な疑問がいくつも出て來る。これ等まで常識として今の文壇に行き互つてゐるなどは、いくらひいき目に、いくら自惚れて考へたとて言はれよう筈がない。今日のやうな低調な日本の評論壇で、それ等が分り切つたことになつてゐるなどといふことは到底私には信じられない。もし果たしてさうであるなら、近來諸處に散見するやうな無駄な論難風の文章やつまらない誤解に基づく論争らしい雜文などは、とくにその影をひそめてゐていゝ筈である。

テューヌ流の考へ方が既に何十年前に出たものであることも否定は出来ない。その結論的命題だけは、今日では一と通り常識的に知られてゐるといふことも、必ずしも否定はしない。併しそれだからと言つて、それだけの理由で、それは分り切つた事だとは言へない。今日に必要ななくなつてゐるとは言へない。要するに、そこ迄遡り、それに觸れて、その一流と相通する方法論を考へ直す必要に面してゐるのである。つまりはその必要を感じるか感じないかが問題に對する態度の分岐點である。テューヌ以來の一と通りの常識的教科書の知識に安心してゐられるかぎり、それだけで別に不足も不安もないかぎり、それは到底實際の文學生活の生きた指導力とはなり得ない。實際の文學生活の生きた指導力とはならなくとも、その漠然たる常識的教科書の斷定を承知してゐることに安心してゐられるといふなら、それまでだ。

悪い意味のアカデミックな反動的傾向の批評家の言ひぐさはいつでも同じ型である。「そんなことは何十年前のフランスのことだ、今日では多少文學知識のあるものなら誰でも知つてゐる」——大體かういつた口ぶりである。彼等は教科書の知識を持つてゐることに安心して、その知識が、現在未來の文學生活に適切な指導方針となつて働くことには一向興味を持たない。それだから、その知識に一層精細な内容を充たし、その知識の形式をさへ變更してそれを現在未來の文學生活に適切

な指導力として行く骨折などには大して興味がない。彼等の眼には教科書の斷定的命題だけがいつでも大きく浮ぶ。そして自分たちにはもう分つてゐる分つてゐると言ひつゞける。

かういふ種類の考へかたもまた、文壇の反動思潮の一つのあらはれである。

少しばかり文學の方法論や批評の方針についての提唱があると、理窟はもう澤山だからその理論を實際に移して説けと言ふ。

性急な、薄弱な、いつまでたつても土臺の固まらない文壇——殊に批評壇の病の一つをその註文のうちに見る。

およそ一般的な意味で理論を實際に移して説くことの必要なことは勿論である。しかしこの問題の場合に於いてもまた、文學の歴史的經過を眼中に置いて考へなければならぬ。今日のやうに、文壇の批評の多くに確かな意志がなく、意志の自覺がなく、無方針の混亂を逞しくしてゐる場合に於いて、最も不足してゐるところのものは文學の方法論上の考察である。一體日本に新文學の開かれてこのかた、恐らく最も不足してゐるところの一つは、この方法論上の考察である。今日までおよそ日本の文學生活に提供せられた文學の方法論らしいものがあつたであらうか。この點では、日

本の文學研究界も、批評壇も、殆んどこれといふほどの基礎的考察を有してゐなかつたと言つて過言でない。明治以來の批評壇に健全な發達のないのも、直接にはこの基礎的考察の不足に由來する。而してその基礎的考察が十分に行はれないといふ事實には、更にまた他の一層複雑な事情がある。とにかくこの方面の考察の不足は蔽ふべからざる事實である。而して今は、いろいろの事情に促されて、この方面の問題について基礎的に考へ直すべき一つの重要な轉回期へ、やつと辿りついて來たのである。而かもそれは、今の批評壇の混亂無意志無方針を整理するといふやうな直接の必要から來たといふよりは、もつともつと廣く深い原因から促がされてゐるのである。社會生活に對する意識の問題を中心として、文學に對する考へかたの上にも、重大な基礎的な動搖が感ぜられつゝある。ある意味では『小説神髓』以前に立ちかへつて、全く新たに考察をし直す必要をさへも感ぜられつゝあるのである。即ち文學觀上の新しい基礎工事を必要と感ずる時が來てゐるのである。新しい方針の必要が感ぜられて來たのである。證據よりも論を必要とする一つの轉回期が來かゝつてゐるのである。その論もまだほんの端緒が開かれたのに過ぎない。論の組織はこれからの仕事である。眞に時代の位置を知るかぎり、寧ろその論の不備をこそ責むべきである。理論はもう分つたなどとは、それこそ分つてゐないから言へるのである。理論の今日に於ける歴史的位位置さへ分つて

ゐないから言へるのである。

文學觀は、従つて文學論は、今や一つの重大な轉回期を豫想してゐる。これに就いての基礎的考察が、これからの批評壇の中心的事業であらねばならぬ。勿論それ等は文壇の時事に關する評論としての形に於いてもあらはれて來るであらう。しかしながら、それはどこまでも新たに提唱せられる文學論の例證としてこれを説明するものである。それによつて新文學論の内容を一層精細に充たして行くものである。つまり新文學論の建設のためのものである。而してその建設は決して容易な仕事ではない。新しい文學觀の理論の建設は、まだまだこれからの仕事である。今から何もかも分らう筈はない。

理論を事實に即して説けといふのはよい。しかし、それが理論を一層よく説明するためといふ意味でなく、理論を卒業したものとしての註文であるときに、それは基礎的考察を封じて、その方面の轉回の機運を妨げるものとなる。眞の批評心を鈍らすことになる。さうでなくてさへこの種の基礎的考察をあまり好むらしくも見えない今の文壇は、理論を卒業したものとして考へることによつて、更に一層在來の脚場に固著することにもなるであらう。

かういふ種類のもの言ひかたもまた、文壇の反動思潮の一つのあらはれである。

自分たちにも時代の方向は分つてゐる、決して現状に満足してゐるのではないと言ふ。それは確かにさうであらう。

聰明敏感な文學者に、それほどのことの、今となつて分らない筈がない。

しかし問題は、それが分つてゐるかゝらないかといふところに在るのではない。問題は分つて後のところに在る。

それが分れば分るほど、インテリゲンツィヤは不安でなければならぬ筈である。彼等が誠實眞摯な人間であればあるだけ、彼等はいろいろの不安と疑惑とを経験すべき筈である。その不安と疑惑とを、次ぎ次ぎに如何に克服して行くかはともかくも、何等の不安と疑惑とを最初から経験しないなどゝゐられよう筈はない。

せめてこの不安と疑惑とを、先づ自分に向つて認めなければならぬ。この不安と疑惑とが、自分自身に向つてさへも認められない場合に、インテリゲンツィヤの苦しみは二重になり、時代の意志へは裏切ることになる。私たちはせめて正直なインテリゲンツィヤでなければならぬ。分つてゐるといふところに踏み止まらうとするとき、それは自のづから停立する形をとる。

そこにもまた反動思潮のほひが多分にある。

有島氏は弱かつたかも知れない。しかし確かに稀に見る正直なインテリゲンツィヤの一人であつた。有島氏の苦悶の中心は、この稀に見る正直なインテリゲンツィヤの不安と疑惑であつた。

(一五・八)

批評と闘志

同じ波は寄せては来ない。

文學上のいろいろの問題も、よく度々繰り返されてゐるやうで、やはりその折々に取り上げられて考へ直されなければならない理由があるのであらう。少くともそれ等の問題のいくらかは。

批評についての問題の如きも、その一つである。

批評の盛んな時代には創作が衰へ、創作の盛んな時代には批評が衰へるといふやうなことを、よほど前に、よく聞かされたことがあつた。批評と創作との關係が、スイーソーといふ遊びのやうに、一方が上ると一方が下るといふやうなものかどうかは、少なくともさう一口には言へまい。この二つの關係を、その消長の上から見て、全體的にきめることは、さしあつての問題ではない。問題を批評に限る。

そして、批評の振はないのは何故かといふ事を考へて見る。この問題を一つの新しい波として。

批評とは何であるか。これも古くして今尙新しい問題だ。しかしこゝでは、さういふ大じかけ

の取り扱ひ方はしてゐられないから、手短かに要點だけを並べる。

文學の研究をおよそ二つに分けて、一つを理論上の問題を取り扱ふ方面とし、今一つを具體的の現象を取り扱ふ方面とする。前者は廣い意味での詩論である。もしくは歴史的詩論である。それに対して後者は文學史と文學批評とである。

文學批評が文學史とちがふのは斷わるまでもない。しかし、文學批評が文學史とちがつてゐる重大な中心的特質は何か。

文學批評は一つの戦ひである。戦ひの具である。それが文學批評の中心生命である。少なくとも文學史と比べて見て、文學批評にはこの特質が著しくなくてはならない。

戦ひといふのが耳ざりなら、主張といつてもよい。

批評はいつでも闘志の表現でなくてはならない。眞に深い闘志の潛まないところに、力ある批評はない。

闘志のないといふことは、およそ生きる意志のないことである。闘志の浅く弱いといふことは、生きる意志の浅く弱いことである。生きる意志の深く強いものであつて、自分と他との關係交渉の成り立つ根本原理とその表現の事實とに對して、冷淡無頓着であることは、到底出來ない話である。

批評は深い有關心の所産である。氣になつて打ちやつては置けないといふ心持ちなしに、批評は生れない。あらゆる邪魔を掃つてどうかしようといふ意志がなくて、力ある批評の生れやうがない。批評は、だから、戦ひではあるが、争闘のための争闘ではない。何ものかを生かさうとする意志、何ものかを顯はさうとする意志の争闘である。

かくの如き批評には光りがある。熱がある。力がある。

およそ文學の發達に於いて、一つの新流風の興るときには、必ずそこに新と舊との戦ひが生ずる。

批評はこの戦ひに必ず参加する。そしてその直接の戦線に立つ。即ち批評は振ふ。

日本の文學で近い例を取るなら、明治三十九年から數年の間に互る、自然主義文學の勃興時代は、創作方面の新流風の興るに伴つて、その新地開拓のために、批評が振ひ立つた時代である。たしかにあの頃の批評は戦つた。戦ふべき意志をもつてゐた。生かし顯はすべき「何ものか」をもつてゐた。だからあの時代の批評には、相當に力があつた。

眞に深い心が、よりを以て、争闘の意志に基いて、生かし顯はすべき「何ものか」を見出し得ないとき、批評は苦悶する。低徊する。そして結局萎縮する。

批評の萎縮とは、批評の意志が自分の周圍を廣く深く心が、よりのうちに取り入れるだけの力を失つて來ることである。

戦はうとする意志がいかに盛んでも、矢を空に放つことは出來ない。ために戦ふべき廣大な「何ものか」を見失ふに至る理由はいろいろであらうが、とにかくそれを見失ふとき、戦ひの意志は既に疲れてゐるのである。戦ひの意志が根本的に廣さと深さとを失つてゐるのである。

それでも尙文學批評といふ文學の一形式がなくなり得ないとき、批評は小ぜりあひになる。狭い小さな範圍で浅い小さなことを取り上げて、氣にしあつて、弱いへろへろ矢を投げかはず。

さうでないなら、殆ど全く闘志らしいものを失つて、現在から殆ど一步も動き進まうとはしなくなる。凡俗的な迎合的な、おもしろみのない鑑賞批評らしいものに腰を据ゑてしまふ。

批評の權威などは、とくになくなつてしまつてゐるのである。

批評が生きて来るためには、ために戦ふべき貴き「何ものか」を見出さなければならぬ。ために戦ふべき貴き「何ものか」を見出すためには、自分と他との關係交渉の成り立つ根本原理とその表現の事實とに對して、新しく深い心がよりをもたなければならぬ。自分一人や、自分と似よつた狭い仲間の小ぜりあひに心氣を疲らすことをやめて、複雑な人間相互の關係交渉の成り立ちに、——廣く社會生活の構成原理に、またその實相に、深い心がよりを抱かなければならぬ。その心がよりの廣さ、深さ、正しさによつて、戦ひの意志は強められる。そして批評が力づいて来る。

今日は實に批評が戦ひの意志を深くし強くすべきときである。

次の時代の批評は、この意志をもつものによつて行はねばならぬ。また次の時代の文學は、この批評に堪へうるものによつて作られねばならぬ。

今日は實にこの明日を待つ。(一五・一)

欠

欠

實ではなかつたらうか。概論風の知識がいつでも大抵そんな風に整頓せられてゐて、またそれが無害有益だと考へられて來たやうな傾きは、たしかに事實あつたといはなければならぬ。而してその結果は、——もしその中心のない、大小輕重の區別の明確でない、つまりしつかりした系統の立たない知識が常識程度にとり入れられて、時に應じて活用させられるといふやうなことになつたとすると、その場合その場合で都合のよいやうに判断や解釋の立ち場を變へて行く一種の多元論的批評の態度ともいふべきやうなものが出來て來る。

多元的立ち場にある批評家を相手にしてもものを言ふといふことは、相當骨の折れる、そのくせいつまりでも埒のあかない、くたびれる仕事でなければならぬ。而してもし、その多元的批評家が、一人や二人ばかりでなく、凡そ文壇に於いて批評らしい發言をする人の大部分までその仲間だといふやうなことにでもなつて來た場合には、さういふ人たちを向うへまはしてもものを言ふといふことは、それが味方である場合でも敵である場合でも、その如何に拘らず、尙更以て甚だ骨の折れる、そのくせいつまりでも埒のあかない、くたびれる仕事でなければならぬ。つまりその結果は混戦あるのみ。誰が何を言つてゐるのだから分らなくなつてしまふ。分るのは多くは怒罵のみといふやうなこと

にもならないとは限らないのである。

文學批評上の論争も、結局は人生觀上の争ひにほかならない。たまたま文學といふ特殊の社會的現象を生活興味を中心對象として、それを機縁に人生觀上の立ち場を表現する要求があればこそ、文學批評も成り立つのである。文學といふ特殊の社會的現象を生活興味を中心對象として、その成立、發達、乃至影響といふやうな點について、一つの系統ある世界を組み立てようといふ要求から、文學の研究も行はれ、またその批評も行はれるのである。文學の研究や批評によつて、一つの人生觀を打ち立てて行かうとするのだと言つていゝかも知れない。この根本の要求さへあれば、たとひその批評の言説のうちに、多少の矛盾や不統一があつても、少なくとも一つの意向だけはその間からあらはれて來ないではゐないであらう。批評の意志が自のづから感ぜられないではゐないであらう。たとひ批評には——それが研究でなくて批評である場合には——たとひその批評にまともな系統や秩序があらはれてゐなくとも、せめてこの一つの中心的意志の表現がなくてはならない。寧ろ批評の場合に於いては、この中心意志の明らかに強くあらはれることが最も必要であるといはねばならない。批評の力といひ熱といふものは畢竟それにほかならないのである。批評に意志を必

要とするのは、批評が決してたゞの受け身の仕事ではないことを意味する(批評が専ら受け身である場合は、批評の働きの一部分に過ぎない)。批評はいつでも結局主張である。

日本の文學批評は、多くの場合内在的批評の範圍を出でてゐない。文學個々の作品の形式や技巧や主題の性質やに關する批評の範圍を多く出でてゐない。内在的批評が、文學批評の基礎條件を成すことはいふまでもないのだが、それだけで批評は完了してゐるとは言へない。批評が文學の社會的成立を是認するところから出立してゐるものである限り、批評は更に一つの社會的現象としての文學を取り扱はなければならぬ。勿論この部分は、批評の恐らくは最も困難な仕事に屬するであらう。しかしながら、この部面の批評なくしては、批評はその中心意志を表現するところまでに至らずして止まるであらう。寧ろ多くの批評は、中心意志の表現を避けるために、内在的批評の程度に止まつてゐたとも見られる點がある。

而かも今は最も切にこの内在的批評以上のものを必要とする時ではないか。社會的現象としての文學を批評すべき時ではないか。この意味は孰れもつとゆつくり詳しく説く機會があるであらう。時間がないから今度はこれだけの雜感にとどめて置く。(一五・一)

「否定」の文學

否定は力である。

事實、なまなかの肯定に比べて、否定ははるかに深い強い力である。

否定の力のあらはれて来るのは、生命の動いてゐる證據である。否定は眞によく大切なものを生かす。否定は眞によく大切なものを育てる。

否定することによつて自己があらはれる。否定することによつて、心の泉が流れ動く。否定することによつて、眞に自から生きる道を見出だす。

少くとも、ロシアの文學に就いて見ると、このことは眞實である。ロシア文學はその源を否定に發してゐる。ロシア文學は否定の中から生れて來た。十八世紀以後、ロシア文學が成り立つて後の事實は、さうである。

ロシアの現實——その現實の見解はまたさまざまに分れた。現實として認めるものの内容や、それに對する解釋は、時により、人によつてさまざまに分れた。しかしながら、とにかくロシアの現

實を對象として、これを肯定するか、もしくはこれを否定するかが、いつでも重要な問題であつた。平生はそんな問題には無頓着であるやうに見えてゐて、心の動搖が深くなつて行けば行くほど、その動搖の底から、形を異にしては、いつでもあらはれて來るのは、この問題であつた。誰でもよく知つてゐる例をあげるなら、トルストイもそれである。トゥルゲーニェフもそれである。殊にドストイェーフスキーがそれである。近くでは、ゴリキエも、プロクも、ソログーブも、アンドリエイ・ビエールも、その他一々名前を並べ立てるの煩に堪へない。

ロシアにとつては、西か東かの問題である。科學か宗教かの問題である。惡魔か神かの問題である。而してそれは、ロシアの現實を如何に否定するかの問題である。また如何にそれを肯定すべきかの問題である。而して、この問題の批評の前には、いつもよくピョートル大帝が立たされる。ピョートル大帝を否定するか肯定するかの問題とさへも、しばしば考へられることがあるのである。

二

君主が主導者となり中心となつて、國家的の見地から、一國の文明文化の改革を、性急に、大膽に、且つまた一徹に斷行しようとする。およそ、ものの分別があつて、多少でも批判を加へたり是

非を辨へたりすることの出来るものは、その批判辨別の力を、悉くこの國家的見地に基く改革に向けねばならぬ。それ以外に、その當時に於いて、批判辨別の力を加へるに足る対象はあり得ないからである。ともかくも、そこで社會に批評が出る。輿論といふべきものの萌芽が出る。凡ての批判は時事評論である。國家的見地からの改革を主題としての時事評論である。

これがピョートル大帝時代のロシアである。——たゞこの時代の時事評論には、力の對立が見られない。少くとも表面に現はれたところでは、力の對立が、その評論の上に見られない。不平もある、誤解もある、呪詛もある、怨言もある、——しかし一方には、改革の主導力として君主が立つてゐる。しかも非凡の斷行家である。精悍な、聰明な、驀進的な斷行家である。これに表て立つて對抗することは即ち死である。そこで、表面にあらはれて來た時事評論は、いふまでもなくその主導力を中心として、その改革の意義を説明し辯護することであつた。時代の聰明な智力は、その時代の最高の智力は、また恐らく、改革の意義を説明し辯護することに自己の本分を認めたであらう。改革の意義を認め得ないことは、その主導力たる君主に楯つくことであるとするとするよりも、文明の自然の勢に、言ひかへれば正しき力に楯つくことであるとしたりに違ひない。さう見ないことは、その時代の最善最高の智力に對する侮辱である。

とにかく評論の対象は國家であつた。殊に時代の最善最高の智力が表明したところは「君主の意志の是認」であつた。文明改革の辯護であつた。そこに個人の心の影を投げ入れるべき餘地はなかつた。改革を正しとすることに於いては、一つであらねばならなかつた。時代の勢力に對する隨順である。

ピョートル大帝から後、文學は専ら文明と、そのために心づかひする君主とのための頌ほめたであつた。眞の意味での社會的根據を有してゐない當時の文學は、自然に宮廷のために作られるほかはなかつたのである。ものものしい、白々しい、臆する色もない阿諛は、女皇アンナにたてまつつたトレディヤコフスキーの、日本との通商を豫言した歌にも見られる。これ等の阿諛の作品が、而かもその宮廷の高貴の人々によつて、さまざまに顧みられなかつたといふことも事實である。文學もしくは文學者といものは、當時の高貴の人々からは、輕侮と戲笑との眼で見られてゐたに過ぎなかつたからである。

三

「君主の意志の是認」から、多く顧みられなかつた宮廷的阿諛の詞華を経て、エカテリーナ二世の

時代に及んで、ロシアの文學は、こゝにはじめて、個人の心の濃き投影を見る。ロシアの現實に對する否定の表白があらはれて來たのである。ラディッシュチエフが、その『ペティールブルグからモスクワへの旅』(千七百九十年)の中で、「農民たちは、その自由を、地主たちから期待してはならぬ、寧ろ最も苛酷な奴隸状態の間からこそ期待すべきである」と言つてゐるのは、強き否定の間からこそ、眞の肯定が生れるといふ意味にほかならない。眞の肯定のためには、強き否定が行はれなければならぬ。エカテリーナ二世が、この書を一讀して、ラディッシュチエフは、「農民からの反亂に未來の希望を置いてゐる」ものであるとしたのは、この書の眞意を正しく理解しなかつたためである。しかしながら、地主の好意や善意にかけられた幻影の消滅は、ラディッシュチエフの心の影を濃くし、深くした。寧ろこの一篇は、ラディッシュチエフの詩である。憤慨と、嗟嘆と、傷心と、自責との心の隅々から、おのづから溢れ出でた一篇の詩である。「吾等は主人であるが故に、吾等は奴隸である。吾等は吾等の同胞を拘束してゐるが故に、吾等は自から農奴である。」といふ後のゲルツェンの心は、既にラディッシュチエフの言葉の中に隨所にこれを見出だすことが出来る。外部の觀察から轉じて、「わが内に眼を向けて見れば、人間の不幸は、やはり人間から發してゐることをさとつた」ラディッシュチエフの言葉には、抑へがたき熱意があり、鮮かな感情の色彩がある。詩である。

ラディッシュチエフの否定の詩は、ロシア文學の道を拓いた。少くとも、農奴制度との闘ひを中心として、懐疑的な、批評的な、諷刺的な心持ちのうちに——現實に對する否定のうちに、ロシアの文學は、その往くべき道の出發點を、はじめて眞に見出だし得たのである。

ロシアは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自から破壊すべき運命を有してゐた。自から破壊し、自から殺すことによつて、はじめて自から甦り、自から建造するに至るのが、ロシアの運命であつた。ロシアの生活の全過程は、自己の破壊、自己の否定を出發點としなければならなかつたのである。自己を否定することが出来るやうになつて、ロシアは初めて自己を生かす道へ出たのである。否定による肯定、死による生、この経路を、正直に、大膽に、一徹に、而して驀らに進んで來たのがロシアである。どこを指して往くか分らないと言はれたトロイカ(三頭立ての轎)は、所詮生きるために死を急いだロシアの姿にほかならない。

否定の道はもとより峻難であつた。死ぬべき運命を有してゐたロシアが、死ぬるために、どの位の苦惱を経て來たかは言ふまでもない。しかし、そのために、否定の力は更に強まり、更に深まつた。悩みと苦しみとによつて、自己に對する要求は更に高まつた。ロシアの文學は、この否定の力と、矜持の心との表白である。生きんがために死なうとするものの地獄の巡歴の記録である。その

色調の上に、おのづから一味の峻厳苦澁のあとを加へてゐるのは已むを得ない。陰惨幽暗の谷から出て、無邊際曠野を往くやうな時にさへ、廣潤のよろこびの間に、北方の白日に、影なき小鬼の躍るを見、風になびく千萬の草の聲なき嘆きを聞く。それは、生きんがために、死んでは死に、死んでは死にして來た、無抵抗の抵抗の姿にほかならない。ロシアの生きようとする力は、これほどまでも深く、逞ましく、豊富であつたのである。

四

ロシア文學に於ける懷疑の胚胎は、恐らくラディシチュエフ以前、もしくはファンキージン以前に遡る。容易に表面にあらはれない力として、鬱屈のまゝに、根深い懷疑と否定との力が存在してゐたであらうことは、ブイピンの如きも、その『文學觀の品隋』の中で論じてゐるのである。ファンキージンや、ラディシチュエフや、或ひはまたノーキコフの前に、諷刺劇詩人カンテミールの如きも、また時代の懷疑的傾向を表現したものと云ふべきである。受身の忍従を、スラヴ民族の最高の美德として考へるくせのある人々は、それ等の早い懷疑的否定的傾向を、外來のものとしてのみ見ようとする。しかし、十七世紀に於けるロシア教會を中心としてのギリシヤ派とローマ派との争ひが、教會の

分離が、果たして何を語つてゐるかを考へて見るがよい。教會の分離、異端の發生、これ等の事象を一貫する精神は、即ち直ちに根深い懷疑的否定的精神にほかならないではないか。この精神は、やがてまた、文學に於ける現實否定の思想である。それはラディシチュエフの『ベティールブルグからモスクワへの旅』となり、ファンキージンの喜劇となり、グリボエードフの『聰明の悲み』となり、リニールモントフ、ブーシユキン、乃至ゴゴリその他の作品ともなつたのである。懷疑と否定との精神が、如何にロシアの文學に重大な力となつて現はれてゐるかは、次第に説くところによつて明らかにならう。

懷疑と否定とは、要するに個人と社會との分裂を意味する。また更に、個人と國家との分裂を意味する。現實と妥協することの不可能、現實を是認することの不可能、それは本來の意味では生活の一種の變態である。苦惱はそこから生ずる。ロシア文學は、この苦惱のうちに沈淪する多くのすぐれた人々を描いた。現實生活の常軌から外れた「よけいもの」は、この分裂を根本的になくするために、更に苦しみ悩んだ。周圍の現實に對する輕侮と嫌惡との苦しみから、そこにはしばしば絶望自棄の色が見える。殊に、ロシアの懷疑は、科學の教へるところに従つて、たとへば國家經濟の見地から、農奴の問題を考察するといふ以前に、もしくはそれ等の考察よりも深く強く、その根柢

には直接端的な感情があつた。懷疑と否定との底には、良心の憤りが、感情の傷みが、中心の力として動いてゐた。而かも、エカテリーナ二世の時代から、アレクサンドル二世の即位の頃に至るまで、殆ど百年に近い間、ロシアには、この傷心と憤激とをなだめ癒やすに足る改革が行はれなかつたのである。生活は百年の間に成長した。國家としての公けのロシアは成長した。思想も亦成長した。しかし、生活の形式は昔のまゝであつた。官僚政府の發達とともに、農奴制度もまた更に固く保持せられて來た。そこで、思想はすべて反抗となつた。それはまた、苦惱と嗟嘆との聲とならざるを得なかつた。歎きの聲は、ひとりユルガの大河の上に流れわたるばかりではなかつたのである。ロシアの文學は、この歎きの歌である。この憤りの詩である。

五

ゴーゴリがかつて自作「死せる魂」の一節を取つて、プーシュキンに読みかされたことがある。プーシュキンは、ゴーゴリの朗讀を聴くと、いつもよくをかしがつて笑つたのであつたが、その時ばかりは、聽いてゐるうちに、だんだんまじめになり、しまひには、幽愁にたへないやうな暗い顔をして來た。いよいよゴーゴリが讀みをへると、プーシュキンは、いかにもさびしさうな調子で、「あゝ

われ等のロシアは、何といふ憂鬱なことであらう」と言つた。

憂鬱なロシア― その憂鬱の間から、一致しがたい矛盾の間から、ロシアに於ける否定の精神は生れて來た。諷刺の文學は生れて來た。十八世紀末から十九世紀へかけての、諷刺の文學は、笑ひの中に解放を求めた。をかしいものは恐ろしくない。少くとも、をかしいものの前には、潛伏することを必要としなくなる。笑ふものは、その笑ひの對象となつたをかしきものの上に立ち、をかしきものは、小さく、つまらないものやうに見えて來る。地主も、ゴーゴリに描かれて、その恐るべき力を失ひ、官僚も、ゴーゴリに描かれて、その愚かさを暴露した。笑ひは、農奴制度と官僚政治との幻影を消滅せしめた。笑ひは破壊であつた。笑ひは否定の力であつた。

ゴーゴリは、ロシアの現實の空虚をまさまざと見せた。この空虚の中にあつて、苦しみ惱みつゝ生きることは、眞に物凄おそろしいことであつた。ゴーゴリは、その笑ひの中へ、物凄さを導き入れた最初の人である。笑ひを、諷刺を、悲劇的なものにしたのはゴーゴリである。

それはゲルツェンの言ふ「變な笑ひ」である。「物凄お笑ひ」である。「身の毛のよ立つやうな笑ひ」である。その笑ひの中には、自責羞恥の感じと、自から嘯む良心の悩みとがある。「をかしさあまつて涙が出る」のではなくして、「泣いて泣いてしまひに笑ふ」ところの泣き笑ひである。

或ひはまた、國家の偉業、英雄の功業のために、その臺石の下に踏みつぶされてしまった、弱い見るかげもない平凡人の一生がある。或ひはまた、現實の羈絆を破つて、天馬空を往かうとして身を亡ぼす驕兒がある。プーシキンもリエールモントフも、それ等をたゞそれだけのものとして観たのではあるまい。

何れもみな、否定の試みである。懷疑である。死ぬべき運命のロシアが、死ぬるために急ぐ道程の記録である。ピョートル大帝の銅像の下に踏みつぶされた平凡人の反抗が、天馬空を往くの概を地上に實現しようとした驕兒の破壊が、二十世紀の革命でなかつたとは誰が言ひ得よう。死ぬることによつて生きようとする否定の力は、革命である。ロシアの文學は、否定の力の發現としてのみ見るには、尙幾多の複雑な要素を有してゐるかも知れない。しかし、この力を中心として、この一角からロシアの文學を読むことは、決してロシア文學を冒瀆することではあり得ない。否定の力は、——生きんがために死なしめるこの力は、豊富な複雑な、頗る變化に富む力である。地に落ちて身を亡ぼす一粒の麥のうちに籠つてゐる力は、いつかあらはれて来る。

否定の力としての文學は、やがて眞に生きる力としての文學にほかならない。繰り返して言ふが、ロシアは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自から破壊すべき運命を有してゐた。自から破壊し、自から殺すことによつて、はじめて自から甦り、自から生き、自から建造するに至るのが、ロシアの運命であつた。ロシアの文學は、自己の否定を出發點として、否定による肯定、死による生、この經路を、正直に、大膽に、一徹に、而して驀らに辿つて來たのである。そこにロシア文學の苦惱と悲哀がある。そこにロシア文學の力がある。地獄に下つて魂を救ひ來つたものの物凄さと、歡びと、力とがある。(一二・五)

平凡人の反抗

千八百三十三年の十月、プーシュキンの『青銅の騎士』は書かれた。これはプーシュキンの数多い叙事詩の中で、最後に書かれたものである。プーシュキンは、その年、ウラルからの歸途、十月の一日から十一月の半ば頃まで、凡そ一ヶ月半を、ニージュニー・ノールヴゴロド縣の世襲の莊園ボルディノで暮した。『青銅の騎士』はこのボルディノ滞在中の作で、プーシュキンの苦心の作である。モスクワ歴史博物館に保存せられてゐる草稿によると、推敲に推敲を重ねたあとが明らかに見られる。ある部分は前後十度に互つて書き直してある。今日傳へられてゐるこの詩の本文は、結局四度目の改削の後に成るものである。

千八百二十六年、ニコライ一世の反動政策の一つとして、文部省は新たに検閲法令を定めた。これから後、プーシュキンの凡ての作品は、特にニコライ一世自からの希望によつて、印刷刊行に先だつて、皇帝の親閲を経なければならなくなつたのである。千八百三十三年十二月六日、ボルディノから歸ると間もなく、プーシュキンは作品公刊の許可を願ひ出た。それは恐らくこの『青銅の騎士』で

あつたらう。十二月十二日には、『青銅の騎士』の原稿が、検閲を経てプーシュキンの手もとへ返されて來た。親閲の結果はプーシュキンに不利であつた。

プーシュキンがこの親閲の結果に對してどういふ心持を懷いたかといふことは、よく分らない。プーシュキンは、その晩年に於いて、内面的の生活の上では、殆ど孤獨を守つてゐたらしく見える點がある。その手紙の中でも、極めて用心深く、それまでのやうに、凡てを打ちあけて語るといふ風がなくなつてゐる。晩年書きつゞけてゐた日記の中でさへ、事實を記すといふほかには、殆んど一語の批評らしい言葉などを加へてゐない。

千八百三十三年十二月十四日の日記には、——「十一日、ベンケンドルフより明朝訪問ありたしとの招きを受く。往く。皇帝陛下の書き入れある青銅の騎士を返さる。」とあつて、削られた言葉や詩の句を記し、¹を附せられたる個所多し。これ等は凡て余にとりては大きな相違を來たすもの。」と言ひ、従つて、出版書肆スミルディンとの約束條件變更の必要ある旨を記してある。それだけである。

同じ月のナッシュネーキンへの手紙に、「金錢上おもしろからぬこと有之候。實はスミルディンと約束すみのところ、青銅の騎士検閲不許可となりたる故、その話は取り消さねばならぬこととなり申候。

この事小生にとりては損失に候。」とあり、また更に同じ人への後の手紙にも、「青銅の騎士は不許可——損失でもあり不愉快でもあり。」とある。ポゴーディンへの手紙にも「青銅の騎士は刊行せられざるべし」とある。こゝでプーシュキンは金銭上の損失を繰り返して言つてゐるが、この作の量から見ても、寧ろこの作の受けた検閲上の壓迫から来る不快を、損失に藉口して洩らしてゐる氣味が察せられる。プーシュキンはこの作の検閲を、實際ニコライ一世が親しく手を下したものと考へてゐたやうであるが、事實は、少くともこの作の場合では、吏僚の目を通したものを最後に皇帝が親閲して、多少の意見を加へた程度のものであつたらしい。プーシュキンも一時はその「親閲」の旨を重んじて、詞句の上に多少改削を試みかけたらしいが、結局それを思ひ止まつて、自作の原形を保留するとともに、刊行のことを思ひあきらめたやうである。

従つて、プーシュキンの生前には、この作の完本は公刊せられるに至らなかつた。わづかに作中の「序詞」の一部が、「ベティエルブルグ」といふ標題で出たに過ぎない。プーシュキンの死後、ジューコーフスキーの手で改削を加へたものが出た。原作の本文を、保存せられてゐる草稿によつて校訂することは、アンニェンコフ以來、ロシア文學史家の仕事の一つであつた。完全な本文は、千九百九年のウーニングゲロフ監修版によつて、はじめて世に出でたといはれる。

二

『青銅の騎士』の序詞は、ロシアの新都ベティエルブルグの今昔を描いて、その創建者ピートル大帝の覇業を歌つたものの如く見える。

ピートル建都以前のベティエルブルグは、荒漠たる北海に沿うて、ニワ河の波速く、小舟の影もさびしかつた。じめじめした沼地の岸邊には、こゝかしこにイズバ(丸太小屋)が黒すみ、そこには貧しいチュホーニェツ(フィンランド人)が住んでゐた。霧にかくれた太陽の光りさへささぬ森は、あたりに鳴り騒いでゐた。

百年は過ぎた。森の間は劈りひらかれ、沮洳の地は堅められ、北方の新都は、きらびやかに、ほこらしく出現した。フィンランドの漁夫が貧しき漁りをなりはひとしたあたりには、宮殿や高塔が聳え立ち、あらゆる異國の船は集まり、ニワ河の岸は花崗岩に装はれ、長橋は架けられ、鬱蒼たる林園は都のところどころを飾つてゐる。夏の白夜の明朗な光り、冬の冱寒の森巖な大氣、薔薇よりも紅みな少女の頬の輝き、泡立つプンシュのほの蒼い水煙の色、——更に軍隊訓練の勇ましさ美しさ、銅帽の閃き、祝砲の轟き。春の氷を流すニワ河の賑ひ。すべてこれ等は、ピートルの新都の光彩

であり、喜悅である。

プーシュキンは、この序詞の終りに於いて、ピョートルの都の、ロシアの如くゆるぎなく榮え誇らんことを願ひ、新都建造のために征服せられた自然も——ニエワ河の水も、すでに心をやはらげ、フィンランドの波も、その古き囚はれの苦みと敵意とを忘れて、かひなき怨みによつてピョートルの永遠の夢をかきみださざらんことを願うてゐる。要するにこの序詞は、ピョートルの覇業を讃し、その成果をたゞへ歌つたものの如くに見える。「ピョートルの創造せるものを愛するプーシュキンの讃歌」の如く見える。ゲルツェンが言つたやうに、ピョートル大帝ロシアを呼び、ロシアは即ちプーシュキンの歌を以てこれに答へたかの如くに見える。この限りに於いて序詞は一篇ベテールブルグの歌である。

しかしながら、プーシュキンの望んだやうに、征服せられた自然は、果たして永久に心をやはらげたであらうか。フィンランドの波は、その囚はれの苦みと敵意とを忘れ、かひなき怨みによつてピョートルの永遠の夢をみだすことをしなかつたであらうか。

『青銅の騎士』の本筋となつてゐる物語の楔は、千八百二十四年の秋の、ベテールブルグの洪水である。それは「征服せられた自然」の反抗である。古き囚はれの苦しみと敵意とを忘れ得なかつ

たフィンランドの波の反逆である。しかし、この作では、それは既に過ぎ去つたことである。この物語は、おそろしかつた過去のおもひ出を、今尙新しい記憶を辿つて讀者に語るに過ぎない。「わが物語は哀しからう」と言ふプーシュキンの言葉によつて、序詞は終りを告げてゐるが、そのこゝに語られる哀しい物語を最後として、ニエワの河波もフィンランドの海の潮も、再びピョートルの都を荒らす勿れといふのが、作者の願ひであつたらしく見える。洪水は引いて往つた。ピョートルの都は再び何事もなかつたやうに、ゆるぎなく立ち、誇り榮えてゐたのである。作者の意は、この哀しい物語の後に、自然の反抗の後に、依然として残るピョートルの大都の壯麗と、そこに象徴せられた彼の覇業とを指し示すのに在つたかも知れない。作の仕組みはさう推測することを許しさうでもある。たゞそこに多少の疑ひがある。

三

十一月のベテールブルグは、陰暗の空に秋の寒さが迫り、ニエワ河の波は荒れたち、雨は窓をうち、風は悲しげに唸る。若いエウゲーニーは、夜遅くよそから歸つてきた。昔は由緒ある家柄であつたかも知れないが、今では世間から忘れられて、晴ればれしい世間をも遠ざかりながら、忘れら

れた昔を悔むでもなく、何處かの役所に勤めてゐた。外套を投げかけ着物を脱いで、寢床に入つたが、いろいろのことを考へて、永い間寝つくことができなかった。——自分は貧乏だ、だから勤勉によつて、一身の獨立をも人の尊敬をも得なければならぬ。それにしても、もう少し智恵と金とがあればよいのだが、一體餘り賢くもないなまけ者ですつと樂に遊んで暮してゐる仕合せ者が、世の中には随分ゐるではないか、自分はもうまる二年も勤めてゐる……それはさうと天候は鎮まらず河水は増し、ニエワ河の橋も大方落ちたらう、こゝ二三日はパラシヤとも會ふことができない。そんなことを考へてゐるうちに、何時のまにか眠りにおちた。やがて嵐の夜の霧はうすれ、ほの白い朝はしらみ、もの凄いい日がきた。ニエワ河は海から吹き上げる風に逆つて泡だち、しぶき狂つて風に吹き戻されつつ、河中の島々を沈め、湧きたち渦捲きつゝ、見るみる町の上に押し寄せてきた。物見高い見物どもは逃げ散つた。水は地下室に流れ入り、下水道は栓の口まで溢れた。水は包圍進撃する如く怒り狂うて、木材商品家具橋梁、さては棺までも街上に押し流した。人々はこゝに神の怒りを見、その神罰をまつばかりであつた。

アリクサンドル一世は、憂愁と困惑との色を浮べて、バルコンの上に出で、洪水の様を眺めて、「神の支配する自然に對しては皇帝も亦せんすべはない」と言つた。町は河のごとく、廣場は湖の

ごとく、宮殿はその中であつて孤立せる島のごとく見えた。アリクサンドル一世は、將士を四方に遣はして、溺るゝものを救はしめた。折からピョートルの廣場には、その片隅に、新しい家が水の上に浮き上り、その階段の上には、片足をあげて、生けるごとくに一對の獅子が門を守つて立つてゐた。この大理石の獅子の上に跨つて、帽子もなしに、手を十字に組み、身動きもせず、恐ろしく蒼褪めたエウゲーニーがゐた。雨も、風も、波も、彼の恐るゝところではなかつた。彼の思ひこめたるまなざしは、遠く一とところを見詰めて動かなかつた。山のごとき大波の逆捲く遠い入海の眞際に、垣根と柳の木と古い小さな家とが見えた。そこにバラシヤとその母とが住んでゐた。エウゲーニーは、つきものとしたやうに、大理石の獅子にとりつけられたやうに、そこを離れることができなかった。見渡す限りまはりには水また水である。たゞ荒れ狂ふニエワ河の上に高く、泰然と、彼に背を向けて、右手を差しのべて立つてゐるのは、青銅の馬に跨れる偶像のピョートル大帝であつた。

嵐は去つた。破壊と狂暴とに倦み疲れて、さながら盜賊の群の、追跡を恐れて、獲物を遺しつゝ、引上げを急ぐがごとく、荒し奪うて水は引いた。エウゲーニーは望みと恐れとわびしさを心に抱いて、まだ鎮まらぬニエワ河の方へと急いだ。河波は勝利に勝ち誇つて、その底に火の燃えたるがごとく沸き立つた。戰場から駆け戻つた軍馬のごとく、ニエワ河は重く喘いでゐた。エウゲーニーは

そこに浮ぶ小舟を見ると、いきなりかけよつて、船頭を呼ぶ。たつきのためには、それほどの波を氣にもかけぬ船頭は、十錢一つでよろこんで、高波を押し切つて乗り出す。さすが馴れきつた船頭も、大分永く荒波と闘ひ、小舟はしばしば今にも二人を乗せて、波底深くかくれるかと見えたが、やがて、向う岸についた。見馴れた町の姿は變りはてし、家は歪み、或ひは壊れ、或ひは波にさらはれて、あたりは戦場のごとく、死骸がそこゝに横たはつてゐる。エウゲーニーは前後も忘れて、まつしぐらに驅けて行く。入海まで来て見ても、それらしい家の影もない。たゞ柳ばかりが立つてゐる。彼はそこら中を歩きまはり、聲高くひとり言を言つてゐたが、にはかに片手で額をたいて、大聲を出して笑ひだした。

夜の霧は、不安の都に降りた。人々は夜更けまで、寝もせず、昨日のことを話し合つた。朝の光りは、疲れた蒼白い雲の中から、靜かな都の上にさしそめた。昨日の不幸のあとは既になく、何事も平常に返つた。町には、平氣な顔をして人々が往き來した。官吏は勤めに行き、商人は洪水に見舞はれた地下室を開いた、損亡を取り返すために、せいぜい高く賣りつけようとしてゐた。家々の裏戸からは、小舟がおろされ、氣の早い詩人は洪水に遭つた不幸な人々のことを、もう詩に歌つてゐた。しかし、エウゲーニーの耳には、ニエワ河の嵐に狂ふ波風の音が響き渡つてゐた。彼は黙つ

て、恐ろしい思ひを胸一ぱいに抱いて、さまよつてゐた。一週間は過ぎ、一月も過ぎた。彼は自分の宿へは歸つて來なかつた。期限が切れたので、宿ぬしは、彼の部屋を、貧しき一人の詩人に貸した。エウゲーニーは、荷物を取りにも來なかつた。間もなく彼は、世間から忘れられて、一日歩きさまよひ、夜は波止場で眠つた。窓から投げってくれるパンきれに飢をしのぎ、着てゐる古びた着物は破れくちた。悪童はあとを追うて石を投げ、御者の鞭が、彼を打つことも珍らしくはなかつた。道を歩くにも、見わけがなかつたからである。しかし彼は、それらを氣にもとめなかつたやうである。彼は心のうちの不安動搖に氣を奪はれて、外部のことは耳にも入らなかつた。かやうにして、動物とも人間とも、この世の人ともあの世の人とも分かぬやうな、不幸な生活を送つてゐた。

ある時彼は、ニエワ河の波止場に眠つてゐた。はや、秋に近く、風は吹き騒ぎ、ほの暗い波は泡をたて、水に洗はれて滑らかな石段をうちつゝ、波止場にうち寄せてゐた。エウゲーニーは目が醒めた。あたりは暗く、雨が落ちてきた。風は悲しげに吹き、遠くの方には夜の闇の中に歩哨が合圖を呼びかはしてゐた。エウゲーニーは、はつとして、まさまさと、過ぎし日の恐しさを憶ひ起した。彼はあはてて起きて、歩きかけたが、またふいと立ち止つて、そつとあたりを氣味悪さうに見廻した。彼は大きな家の圓柱の下にゐた。入口には片足をあげて、生けるがごとく、門を守る一對の獅

子が立つてゐた。見あげる間の空には、圍ひを繞らした岩の上に、右手をさしのべて、ピートル大帝の偶像が青銅の馬に跨つてゐた。

エウゲーニーは身慄ひをした。考へが、もの凄いほど冴えてきた。洪水のあつた場處の見分けがついてきた。自分や、獅子や、廣場や、間の中にゆるぎもせず昂然として立つてゐるあの偶像のまはりに、波の荒れ狂うたその場處の見分けがつくやうになつた。その偶像のピートルの宿命的な意志によつて、この都は海のほとりに建てられた。取圍む霧の中にももの凄くたてる彼の智力よ！彼の意力よ！またその馬の勢は！馬よ、何處いづこに向つて駆け、何處に往いて止らうとするのか。運命の力強い支配者よ、斷崖の上、深淵に臨んで、鐵の轡を引き緊めて、ロシアを後脚で立ち上らせたのも、この通りではなかつたか。

ピートルの偶像の臺石のまはりも、狂へるエウゲーニーはめぐりつゝ、物凄きまなざしを、この半世界の支配者の顔に向けた。彼の胸は、壓しつけられる思ひがして、額を冷たい柵におし當てた。兩眼はかすみ、心臓には、炎が燃えわたり、血は沸きかへつた。彼は、傲然たる巨人の前に、心暗み、暗黒の力につかれたものごとく、齒をくひしぱり、手を握りしめ、「よし、不可思議なる建造者よ！おのれ！……」と、憎々しげに身を慄はせて呟いた。そして、にはかに一目散に逃げだした。

た。もの凄き皇帝の顔が、嚇と憤怒に燃えて、靜かにこちらを向いたやうに思はれたのである。彼は人氣のない廣場を驅けて行く。その後から、あたかも雷鳴のごとく、——地響きする鋪石道いしぢの上を、カッパ、カッパと重く驅け來る蹻音が聞こえる。蒼白い月の光に照らされて、馬上に右手をさしのべ、蹄の高く、青銅の騎士はエウゲーニーを追ひかける。かくしてこの哀れた狂人は、夜もすがら、何處へ行つても重き蹄の音をたてた、青銅の騎士に追はれた。

この時以來、その廣場を通る度に、彼の顔には恐怖の色が浮び、痛みを抑へるやうに、急いで胸を手に當てた。着古しの帽子を脱ぎ、きまり悪げに眼を伏せ、こそこそと脇を行つた。

海の岸近く小島が見える。折々漁夫が歸りにおかれて、そこで晩飯を煮たきしたり、官吏が日曜の舟遊びに、人氣もないこの小島を訪うた。そこには草の葉一つ生えなかつた。洪水はそこへ古びた小屋を打ち上げた。それは水の上に黒い葦の茂みのやうに浸つてゐた。去年の春、それを筏に載せて運び去つた。小屋の中には何もなく、すつかり壊れてゐた。關際にあの狂人を見つけた。そこでその冷たい死骸を、菩提のために葬つた。

プーシユキンがその序詞の終りで、「わが物語は哀しからう」と言つた一篇の哀史はこれで終りを告げてゐる。前に説いた序詞の意味と、この物語の展開とをあはせて考へると、そこにはさまざま

の解釋が成り立つ。

四

『青銅の騎士』に描かれたエウゲーニーを中心とする「哀しき物語」は單純である。しかし、その物語の楔くわになつてゐるペティブルグの洪水に關聯して、一面に於いてブーシュキンブーシュキンは序詞の中でピョートルの新都創建を歌ひたへ、他面に於いて、その「哀しき物語」の中では、青銅の騎士ピョートル大帝を、エウゲーニーに對立する人物として描いてゐる。エウゲーニーの戀人バラシヤのことなどは殆どわづかにその名を擧げてゐるに過ぎないが、ピョートル大帝の銅像については、生あるものゝ如くに描き出してゐる。蒼白い月の光に照らされて、馬上に右手をさしのべ、あたかも雷鳴のごとく、重い地響きを立て、鋪石道いしぢかみの上をカッパ、カッパと追つ駈けて來る青銅の騎士の姿は、單にエウゲーニーの眼に映つた幻影としてのみは見られないやうなところがある。物語の本筋は、哀れな見るかげもない一小官吏エウゲーニーの哀史に過ぎないのであるが、そのささやかな平凡人の哀史の上に、ペティブルグの都が、従つてピョートル大帝の姿が、つきまとひ、のしかゝつてゐるやうに感ぜられる。ピョートル大帝とエウゲーニーと、この二つの姿は、甚だ均衡の取れないな

がらに、ある對立の位置に置かれてゐるやうにも思はれる。物語の結末としては、いふまでもなくエウゲーニーの死であり、ピョートル大帝の雄圖の頌榮であるとしか見えないのであるが、しかしこの作品を通じての印象は、さういふ表面の經過の中から、一種の疑ひと不安とを残す。

ピョートル大帝の新都創建は、その結果として、多くの犠牲を出だした。新都の創建はニワ河の水をせき止め、その流れを狭めた。洪水の氾濫は、一つはその結果である。こゝに新都をさだめることさへなかつたなら、洪水に伴ふ多くの不幸もなかつたであらう、エウゲーニーの哀史も、所詮ピョートル大帝の雄圖が生み出だした、ささやかな犠牲の一つに過ぎない。しかし、ピョートル大帝の新都創建には、雄大なる國家的生命を創造せんとするもの意志がある。そのささやかな部分的なもの犠牲に對する吾等の同情をやめてしまふことは出來ないが、「部分的なものに對する一般的なもの勝利」をしづかに認めることはせねばならぬ。「國民と國家との運命を安泰にするためには、この青銅の巨人は、個々人の運命をいたはつてゐられなかつた」のである。その新都創建者の背後には、「歴史的の必然」がひかへてゐるのである（ブーシュキンの『ブーシュキン論』第十一章、一八四六年）。——かういふブーシュキンの見方によると、この物語は、要するに集合的の意志と個々の意志との衝突を意味する。個人と歴史の必然的な過程との衝突を意味する。集合的の意志

の代表者はいふまでもなくピョートル大帝である。個々の意志の代表者は、いふまでもなくエウゲーニーである。而してこれ等の二つの意志もしくは原理の衝突の結果は、歴史的必然の代表者ピョートル大帝の勝利である。歴史的必然、一般的集合的な力の前には、個々の人間の意志は、もろくも踏みじられて行く。「この詩は所詮ピョートル大帝の頌榮である。ロシアの偉大なる改革者を歌ふにふさはしい詩人の頭に、凡そ浮び得るかぎりの最も大膽な、最も壯大な頌榮の詩である。」——これがピョーリンスキーのこの詩に對する解釋である。

五

メレジュコフスキーは、この詩に於いて、ヨーロッパ文明の歴史の上で相闘ふところの二つの根本的な力の對立を認めてゐる。即ちその一つは異教思想である。今一つはキリスト教思想である。一つは自己を滅却して結局神に到るの思想であり、今一つは自己を神の如くに擴大して、覇者英雄の偉業を達成せんとするの思想である。ピョートル大帝は即ちこの個人主義的英雄主義思想の權化であり、エウゲーニーは、即ち没個人的集合的意志の表現である。

一方には、ゴゴリの『外套』のアカキー・アカキーエキツヤ、ドストイェーフスキーの『貧し

き人々』のマカール・デューウシキンのやうな、ロシア文學に於ける古典的な人物の中にかぞふべきエウゲーニーがある。そこには「さゝやかなものさゝやかな幸福」があり、「かざりなき心のかざりなき戀」がある。その一方では、「ロシア國民の中に潜みかくれてゐて、世界に未だ知られてゐない力を宣揚する」超人的な英雄ピョートルがある。しかし、荒れ狂ふニエワ河の上に高く、泰然と、背を向けて、右手をさしのべて立つてゐる、青銅の馬に跨れるピョートル大帝にとつて、「さゝやかなもの」の亡びが、何である。「ロシアの如くゆるぎなき」新都の創建者にとつて、パラシヤとその母との住んでゐた柳のほとりの古びた小さな家の流失が、何である。巨人の意志はそれ等の一切をあげて押し流し沈めてしまふ。無数の、同じやうな、役にも立たななさうな人間は、たゞそれ等の枯骨の上を踏み越えて、偉大な選ばれたものが、その目的に到達するためにのみ生れて來るのではないか。亡び行く「さゝやかなもの」は、「運命的な意志によつて、海のほとりに都」を建てた人の前にぬかづくべきではないか。

「しかし、最もさゝやかなものゝ中の最もさゝやかなもの、土より出でしそよげる草の弱き心の中に、——彼のかざりなき戀の中に、英雄の意志の生れ來りしところにも劣らぬ無限の深みが開かれたら？——もし地の蟲おのが神に反いて起たば何とする？ 狂人のはかなき威嚇が、果たして巨人の

青銅の心を貫し、彼を戦慄せしめることがあるであらうか。」(メレジュコーフスキーの「ブーシュキン論」)

偶像の臺石のまはりを、

あはれな狂人は一とめぐりして、

物すごいまなざしを

半世界の君主の顔に向けた。

彼の胸は押し迫り、

額を冷たい柵におし當てた。

両眼は霧にかすみ、

心臓には炎が燃え走り、

血は沸きかへつた。

傲然たる巨人の前に、

彼は心も暗くなつた——

齒をくひしばり、手を握りしめた

暗黒の力につかれたものゝやうに。

「よし、不可思議な建造者よ！

おのれ！」憎々しげに

身を慄はせて呟いた……

そしてにはかに一目散に逃げ出した。

おそろしき皇帝の顔が、

嚇と憤怒に燃え立つて、

靜かにこちらを向くと見えた……

・メレジュコーフスキーの説くところによると、おとなしきさゝやかなものが、己れの心の中に開かれた反抗の深みに自から慄然としたのである。わが心の底の聲の物凄さにおびえたのである。しかし手套は投げられた。微小無力なるものの偉大なるものに對する判決は下された。「よし、おのれ！」といふエウゲーニーの言葉は、吾等微小にして無力なるものも、ピートル汝とともに、尙よく闘ふべし、而して勝敗は神のみぞ知るといふ意にほかならない。手套は投げられ、「傲然たる巨人」の靜安はやぶられた。青銅の騎士は狂人のあとを追ふ。物語の最後は狂人の水死に終つてゐるが、しか

しその狂人の幻想は前兆的である。彼の傷けられた心のかすかな眩きは、全く消えてはしまはないであらう。雷鳴のごとく地響きする青銅の馬の蹄の音に、かき消されてはしまはないであらう。而してプーシュキン以後のロシア文學は、凡てこの「ロシアを後脚で立たせた」巨人に對するガリレヤ思想の反抗である。ゴーゴリ、ドストイェーフスキー、トルストイ、それ等の神祕的傾向の人々は勿論であるが、トゥルゲーニェフ、ゴンチャロフの如きも、表面こそは西ヨーロッパ派に屬する如く見え、その實本質的には同じく西ヨーロッパ文化の敵である。凡てこれ等の人々は、ロシアをピョートルから呼び戻すであらう。即ちロシアの日の光りに照らされたロシアの大地の母胎へ、神の信順へ、農民のかぎりなき心へ、或ひはまた天使の如き白痴の微笑へ、而して、彼等も亦、異口同音に、この微小なるものの偉大なるものに對する反抗、「怒れる蟲」の叫びに聲をあはせるであらう。

メレジュコフスキーはかやうな意味に於いて、微小無力なるものの反抗を是認し、異教思想の理想に對するキリスト教思想の反抗を是認し、従つてエウゲーニーを是認してゐるのである。

六

プライローフスキーの『プーシュキンとその同時代の人々』の第七冊の中に記されてゐるところ

の、ジョゼフ・トレチャク教授のプーシュキンとポーランドの詩人ミツケーキッチとの交遊關係を論じたもの、イワノフ・ラズウームニクの『ロシア社會思想史』第一卷にプーシュキンを論じたものなどは、ピョートルを國家の權威の權化と見、エウゲーニーの怒れる眩きを専制政治に對する個人々の反抗と見て、この二つの對立にこの詩の意味を求めようとしたものの如くである。トレチャク教授の解釋によると、プーシュキンは、ミツケーキッチの詩の中に、あたかもプーシュキンが一時頃の自由思想を棄ててしまつたもののやうに非難してゐる意味を見出した。君主のために頌榮の詩を作り、萬民の苦しみをよるこぶかの如きものに對するミツケーキッチの非難を、プーシュキンはわがこととして受け取つたのである。しかし、プーシュキンは、これに答ふるに愛國の情に充ちた詩を以てすることとは好まなかつた。ロシアの君主獨裁とその意義に關するプーシュキンの考へは、別の形で答へられねばならなかつた。それがこの『青銅の騎士』であるといふのである。

トレチャク教授の言ふところによると、ミツケーキッチの『ピョートル大帝の記念像』もプーシュキンのこの詩も、ともにヨーロッパ風の個人主義とアジア風の國家思想との鬭争を意味する。たゞミツケーキッチは個人主義の勝利を豫想し、プーシュキンはその全き敗北を豫言してゐる。即ちプーシュキンがこの詩で言ひ現はさうとしたところのものを、トレチャク教授の解釋によつて言つて見ると、

「なるほど、自分は自由の宣揚者暴虐の敵であつて、また今も尙さうである。しかし、公然と専制政治に戦ひを宣したとすれば、自分は發狂したものと見えはしないであらうか。ロシアで生活しようと思へば、どうしても國家全能思想に服従しなければならない。さうしなければ、國家全能思想は、發狂せるエウゲーニーと同じやうに、自分をも追跡するであらう。」といふ意味に歸着するといふのである。イワノフ・ラズウームニクの言ふところでは、「個人は國家の力によつて身を亡ぼすばかりでなく、征服せられてしまふ。」プーシキンは青銅の騎士によつて代表せられてゐる國家の力の前に、個人が妥協隨順すべきことを提議してゐるらしく見えるといふのである。

ピョートル大帝とエウゲーニーとの對立に、何等かの意味を求めようとした以上諸家の考察は、それぞれに内容を異にしながら、その眼のつけどころに於いては一つである。それがベティエルブルグの新都そのものであるにせよ、ピョートル大帝その人であるにせよ、もしくはまた、青銅の騎士としての巨人の偶像であるにせよ、その一方に於いて、エウゲーニーに對立するものが、ピョートル大帝乃至その力の象徴表現と見るべきものであることに於いては一つである。そこで考察批評の要點は、凡そ二つに分かつことが出来る。即ちピョートル大帝乃至その力の象徴表現と見るべき一方の原理が何を内容とするか、またそれに對立するエウゲーニーの象徴表現する原理の内容が何である

か、——即ちこの相對立する二者の内容が何であるかといふ問題がその一つである。而して、その何等かの内容を有して相對立する二者の關係が、結局どういふ結末に達してゐるか、——少くとも、この詩がその對立の將來の運命に就いて、如何なる暗示と豫想とを與へてゐるかといふ問題が残る一つである。

ピョートル大帝乃至その力の象徴表現が、一般的なもの、國家國民の安泰、乃至歴史的必然といふやうな原理を代表すると見るピエリンスキーの考へは、それを國家思想の權化と見るトレチャク教授の解釋と、必ずしも本質的に異なるものではないやうである。ピエリンスキーがやゝ哲學的に、抽象的に、歴史の必然性とか、一般的なものとかいふ言葉を用ゐてゐるのに對して、トレチャク教授やイワノフ・ラズウームニクが、端的に國家思想乃至國家全能思想と言つてゐるところは、前者の解釋が廣汎に過ぎ、後者の解釋が狭いながらこの場合にびつたりはまるといふ相違を示してゐる。しかし、ピエリンスキー自身國家國民の安泰といふやうな言葉を用ゐてゐるところを見れば、事實に就いては少くともこの場合結局同一のものを指してゐると見てよい。次ぎに、このピョートル大帝乃至エウゲーニーの對立關係に就いて、ピエリンスキーも、トレチャク教授等も、結局國家的必要が個人の幸福を顧慮してゐられないで、個人の幸福は無遠慮に踏みに行かれて行くことを認めて

る。しかし、前者の解釋では、それ故にこの詩はピョートルの偉業の讚歌であるが、後者の解釋では、個人は已むを得ずその強き力に隨順して行かねばならぬといふ意を含めてあるとする。この二つの異なる解釋を比べて見ると、後の解釋に、何となく一脈の不安が潜み、抑塞の氣が流れてゐる。ピエリンスキーの批評が、千八百四十六年に出たものであり、トレチヤク教授等の批評研究が、千九百六年乃至十二年頃に出たものであるのを考へ合はせて見ると、そこには時代の空氣の差が、批評家の考へかたの上に、少くとも表現の上に、多少は働きかけてゐると言へないでもない。

七

ピョートル大帝乃至その象徴とエウゲーニーとの對立を、直ちに異教思想とキリスト教思想との對立争闘と見るメレジュコフスキーの觀察には、幾多の無理があり、不自然がある。ピョートルを異教思想の代表と見ることは、まだしも相當の理由根據があるとしても、エウゲーニーをキリスト教思想の代表と見ることは、はるかに多くの疑問があり得る。

メレジュコフスキーのこの解釋は、ロシア文明史の二つの相對立する思想傾向としての西ヨーロッパ主義思想とスラヴ國粹主義思想とを、直ちに異教思想とキリスト教思想とに改名せしめたもの

如くにも見える。ピョートルは、西ヨーロッパ主義思想の先達として、その最初の最大の指導者として、ひろくロシアの評論家の間に認められてゐるからである。勿論、ピョートル乃至その象徴に、多分の西ヨーロッパ主義的乃至異教思想的傾向のあることは事實である。しかし、エウゲーニーにあるものは、果してピョートル以前にかへれと主張するスラヴ國粹主義思想であらうか。エウゲーニーのうち、ゴゴリの『外套』や、ドストイェーフスキーの『貧しき人々』などの主人公に共通するもののあるのも事實である。而して、『外套』のアカキーヤ、『貧しき人々』のマカールや、多くのロシア的、スラヴ的キリスト教思想の匂ひを有してゐることも亦事實である。しかし、それだからと言つて、エウゲーニーが、直ちにまたスラヴ的キリスト教思想の匂ひを同じやうに有してゐるとは言ひ難い。エウゲーニーを、アカキーヤやマカールと比べると、そこに見出されるものは、エウゲーニーのみひとり有するところの特異な一つの點である。或ひはまたアカキーヤやマカールも、いつかは感じもしたであらうし、また必ず感ずるに至るであらうところの、ある一つの心持ちである。それが、エウゲーニーに於いて、明らかに描き出されてゐる。彼等は凡て、「さゝやかなものさゝやかな幸福」を奪はれたものである。たゞ、そのさゝやかな幸福を奪つたものが、エウゲーニーに於いてはピョートル大帝乃至その象徴であつた。國家の名に於いてする獨裁君主の「運

命的な意力」であつた。少くとも、エウゲーニーにはさうだと思はれた。そこで、メレジュコフスキーの謂はゆる「怒れる蟲」の叫びが、かすかながら、きれぎれながら聞こえて來た。その言葉は終つてゐない。その未完了の言葉に、句切りを附けるものは後の時代である。しかし、とにかくその言葉は發せられた。「手套は投げられた。傲然たる巨人の靜安はやぶられた。」狂人の幻想ではあるが、それは前兆的である。雷鳴の如く地響きする青銅の馬の蹄の音にも、その狂人の傷いた心のかすかな呟きは、全くかき消されてはしまはない。この點に關するメレジュコフスキーの解釋は正しい。即ち、エウゲーニーの反抗乃至抗議が、そのままに消え失せてしまはないものと見た點に於いて、私はこの批評家の解釋に同意を表する。これはその後に於ける歴史上の事實によるといふよりも、このプーシキンの叙事詩そのものの結構内容が、自のづから暗示するところによるのである。とにかく、メレジュコフスキーが、微小無力と見えるものの反抗を是認し、エウゲーニーの反抗を是認してゐる點に於いて、この詩に對する解釋上、一つの重要な暗示を與へたことは見のがすわけに行かぬ。

しかしながら、上のやうに考へて來れば來るほど、エウゲーニーの反抗を以て、ピョートル乃至その象徴に對するガリレヤ思想の反抗と見る、メレジュコフスキーの解釋には、疑ひが生ずる。プー

シキンの以後のロシア文學が、神の信順へ、或ひはまた天使の如き白痴の微笑へ、ロシアをピョートルから呼び戻さうとしたものであるといふ、メレジュコフスキーの解釋には、少なからぬ疑ひが生ずる。「怒れる蟲」の叫びは、果たしてガリレヤ思想の反抗にのみ終始すべきであつたらうか。天使の如き白痴の微笑へ、ロシアをピョートルから呼び戻すことだけで満足すべきであつたらうか。私は決してさうは思はない。この解釋には、いかにも普通にいふところのロシアくさいところがある。しかし、それこそは、「ロシア國民の中に潜みかくれてゐて、世界に未だ知られてゐない力」を、眞に徹底的に認めきはめようとしなないセンチメンタルな考へかたである。天使の如き白痴の微笑を目して、ロシアをその本源の姿に見るとするが如きは、その白痴の微笑の表面をのみ見て、——もしくはそれを神祕的センチメンタリズムの眼からのみ見て、その底にさか巻く眞の反逆破壊の意志を読み取らないものである。また、およそ、否定破壊の精神が有する、根本的な創造の意志を洞察し得ざるものである。メレジュコフスキーが、その神祕的、ガリレヤ的センチメンタリズムを脱し得ないで、最近の革命の後、著しく反動的になつて行つたことは、彼の從來の思想傾向から觀て、自然の順序といはねばならぬ。

ビートル大帝乃至その象徴が、この詩に於いて、國家全能の思想をあらはし、君主獨裁の威力の表現であるとするのは尤もである。これはこの詩に現はれた明白な事實であつて、これ以上の解釋は、この詩を離れたものとなる。この詩の解釋に於ける問題は、その國家の威力に對するエウゲーニーの關係であらねばならぬ。

ビートルの銅像は、ビートルの表現する威力の象徴と見られる。ビートルの威力は、初めにベティルブルグ建都の雄圖となつて、先づ自然の力を征服した。時は百年を過ぎても、尙その威力を誇示することの出来るものは、象徴としての銅像であつた。生けるビートルが、かつてフィンランドの海の波を征服して、この都を建てたやうに、威力の象徴としての銅像は、時の前に、自然の暴威の前に、超然として聳え立つた。それはあたかも「運命の支配者」であつた。この「哀しき物語」は、この「運命の支配者」の前に、自然の反抗の無力であつたことを語つてゐる。

朝の光りは

渡れた蒼白い雲の中から

静かな都の上にさしそめた。

もう昨日の禍の

あとさへも見えず……

何事もみな平常に返つた。

しかし、この自然の反抗は、その「盜人の如くに」過ぎ去つたあとに、人間の心の反抗を残して行つた。

「よし、不可思議な建造者よ、おのれ！」と言つたエウゲーニーの言葉は、くはしくは果たして何を意味するか、——微小無力のものとも雖も、自分の運命の上に加へられた暴力に對しては、やがて復讐することがあり得るといふのであるか。聲もなく、意志もなき、白痴の微笑のロシアも、自己の意志を強ひんとする支配者に向つて、やがて既に手をあげて来るであらうといふのか。それ等はすべて明白でない。しかし、この場合、この言葉の明白であるなしは、必ずしも重大な問題ではない。重大な意味を有するのは、あの、「も少し智慧と金とがあればよいのだが」といつてゐたほどのエウゲーニーが、にはかに國家の威力の象徴、ビートルの銅像に向つて、對等の立ち場在るが如く、この「半世界の支配者」を威嚇するほどの力と勇氣とを感得して來たといふこと、即ちこの一

事である。

一年前の洪水の折には、ビョートルの銅像は荒れ狂ふニウワ河の上に高く、泰然と、エウゲーニーに背を向けて、右手を差しのべて立つてゐた。しかし、今は、そんなに平然と、エウゲーニーを無視してはゐられなかつた。あの微小無力なエウゲーニーを、國家の威力の象徴たる青銅騎馬のビョートルが、無視輕蔑してばかりはゐられなくなつた。「おそろしき皇帝の顔が、嚇と憤怒に燃え立つて、靜かにエウゲーニーの方を向くと見えた。」この一事既に多くを意味する。

メレジュコーフスキーは、エウゲーニーが自から言葉を發するや否や、にはかに一目散に逃げ出したのは、おとなしくさゝやかなものが、己れの心の中に開かれた反抗の深みに自から慄然としたのである、わが心の底の聲の物凄さにおびえたのであると言つてゐる。エウゲーニーを主として心理的に説明すれば、或ひは正にさうでもあらう、しかしながら、巨人の銅像は、エウゲーニーの心の中に開かれた反抗の深み、心の底の聲の物凄さに、果たして慄然としなかつたであらうか。ビョートルの銅像が、嚇と憤怒に燃え立つて、靜かにエウゲーニーの方をふり向いたのは、もはやその言葉が無視してゐられなくなつた證據である。「狂人のはかなき威嚇が、巨人の青銅の心を貫し、彼を戰慄せしめることが」出來たからである。エウゲーニーは、たしかにビョートルを動かした。微小無

力な一凡人の反抗の聲は、國家の威力を戰慄憤怒せしめるに足りたのである。

巨人の銅像は、憤怒の面を向けるだけで安心してはゐられなかつた。「考へが物凄いほど冴えて來た」その刹那に、エウゲーニーの念頭をかすめたところのものは何であつたか。その電光の如く閃めき走つた一念こそは、青銅の巨人が、あたかも雷鳴の如く地響きさせて、鋪石道じやいしだうの上を、カッパ、カッパと蹄の音高く、蒼白い月の夜のベティルブルグの町々を、夜もすがら、追跡してやまなかつたところのものではないか。そこには、追跡しても追跡しても捕へることの出來ない、逃げても逃げてもふり棄ててしまふことの出來ない、一念の閃めきがあつたのである。この哀しき物語の中でこそ、人間の反抗も、この一夜の追跡を最後として、エウゲーニーの水死に終つてゐるが、あの物凄い追跡は、果たしてあの一夜で終りを告げたであらうか。少くとも、プーシュキンはその簡潔な言葉で、吾等の前に、皇帝とその臣民との争鬭の一場景を描き出したのである。人はこの一事を見のがしてはならぬ。

九

プーシュキンはその青年期に於いて、政治上の解放運動に加はつてゐた。十二月黨の人々とも親し

かつた。彼が南ロシアに流竄せしめられたのも、政治上の解放を歌つた詩がその主要な一原因となつてゐた。彼の解放思想は、しかしながら、概して終始溫和であつたのが事實である。革命の廣場の上にこそ、偉大なる自由の日は昇るといふやうな意味を歌つたものもないではないが、法は凡て支配者がこれを與へるといふやうな考へは棄て切らなかつた。

しかし、千八百二十五年十二月十四日の十二月黨の叛亂以前に於いて、彼は既に革命に對する態度を著しくあらためた。自由は政治組織の強制的變革によつては來たらず、ひとりの精神の教養によつて得られるといふやうな考へに傾いてゐた。つまり、眞の自由、眞の革命にとつて、最も力強い根據となるものは、外面的の力よりは、人間の心の力であるといふのが、その當時のブーシュキンの考へであつた。この考へが、やはり『青銅の騎士』に於いてもその根柢を成してゐるところがある。

ピョートル大帝は地上絶大の支配者として、自然の反抗、自然力の革命には少しも動かなかつた。しかし、微小な平凡人の自由な心の反抗は、さしもの地上絶大の支配者を憤怒せしめた。その雷鳴の如き重い蹄の音によつて、この一狂人の心の眩きをかき消さうと、青銅の巨人は、終夜ベティールブルグの町々を、追跡した。しかし、メレジュコーフスキーの言つたやうに、その眩きは、蹄の音

にかき消されてはしまはなかつた。追跡するところに、逃げるところに、その眩きは——またその蹄の音は、夜もすがら聞こえた。

暴虐に對する暴力の反抗はこれを信じない。しかし、青銅の騎士が、いかに高くゆるぎなく立つてゐようとも、それは決して永遠の生命を有してはゐない。自由は、平凡な、微小な人間の心の底から求められる。一旦その心の無限の底が開かれると、そこから發する眩きは、如何なるもの音を以てしても、もうかき消すことは出來ない。その眩きは、必ず聽かれなければならないのだ。少くとも、その眩きは、到るところに、人の耳を追ひ、人の心を追ふ。——ブーシュキンの意は、おそらくかういふところに在つたであらう。一人のエウゲーニーは、一夜の追跡で終るかも知れぬ。しかし、エウゲーニーは、一人でない。あまりに多過ぎるほどのエウゲーニーがある。而してこれを追跡するピョートルは、——國家の威力の象徴は、いつでも一人だ。つまりこの一平凡人の反抗は、一切の端緒である。地獄に下つて救ひを求め來たらうとする心の最初の發動である。狭い、しかし深い心の洞から吹いて來る冷たい風の、遠い、かすかな音である。

舊世界の大組織を兩肩に支へてゐた巨人アトラントの上に、雷鳴と嵐とがつゞけさまに襲つて來た。雷鳴は世界の大戦である。嵐は革命である。世界大戦の雷火は、國と國との「友誼」のセメン

トを焼きつくして、憎みと敵意とを、——征服慾を、果てしなく人の心に燃え立たせた。

そこへ革命の嵐が来た。

民の怒りの革命が来た。

生命の力は豫言的である。文學は豫言である。それは破壊を豫言する、少くとも、新らしき創造のための破壊を豫言する。

民の怒りの革命は、結局エウゲーニーの怒りのよみがへりではないか。それはビョートルの異教思想に對するガリレヤ思想の反抗でもなければ、天使の如き白痴の微笑に窮極の安定を見出すものでもなかつたのである。況んやそれは、國家の威力の前に妥協隨順するものでは勿論なかつた。プーシキンはプリーツフの説いてゐる如く、心の革命を最も重く見てゐたであらう。しかし、その心は、既に早く、巨人の銅像をして終夜ペティエルブルグの町々を奔馳せしめた。その心が、革命の嵐を呼びおこしたのは、決して不思議ではなかつた。

繰り返して言ふ。一人のエウゲーニーは、一夜の追跡で終るかも知れない。しかし、エウゲーニーは一人でない。あまりに多過ぎるほどのエウゲーニーがゐるのだ。而して、これを追跡するビョートルは、——國家の威力の象徴は、いつでも一人だ。つまりこの一平凡人の反抗は、一切の端緒で

あつた。地獄に下つて甦り來たらうとする心の最初の發動であつた。狭い、しかし深い心の洞から吹いて來る冷たい風の、遠い、かすかな音であつた。それは、雷鳴の如く地響きさせる重い蹄の音と雖も、到底かき消すことの出來ないものであつた。(二・六—七)

生命感の點火

プーシュキンの『青銅の騎士』に於いて、讀者は二つの力の發動の姿を見る。一つは自然の力である。今一つは人間の心の力である。自然の力は、反抗して、やがて自のづから静まり、人間の心の力は、自然の暴力の鎮靜するに伴つて、その荒廢の中から、かすかに反抗の眩きを洩らす。而してその眩きは、夜もすがら、青銅の騎士の蹄の音に追はれて、消えがちになりながら、いつまでも消えてしまはない。青銅の騎士の耳には、そのかすかな眩きがこびりついて、氣になる。その眩きには、かすかながら、打ち棄てて置けないものがあるからである。不安である。遠く迫り来る不安の蹙音である。そこに、あの詩の緊迫せる力が集注せられる。

あの詩の解釋評論を試みて後、丁度一ヶ月を隔て、大震と大火災とが來た。自然の暴力が一時に怒り狂ひ、地水火風四元の變が一時に來た。人間にとつては變災であるが、自然にとつては、合理的な必要に基くその力の發動にほかならなかつたのである。複雑な都會生活の中に、自然のエレメンタルな力が、微妙に織り込められ、おとなしく従へられてゐるやうに、人々は思つてゐた。し

かし、自然の力は、依然としてエレメンタルであつて、その根本的な必要と要求とを忘れてはゐなかつたのである。自然の力は、その根本に於いて、依然として單純にして強烈であつた。自然の單純強烈なエレメンタルな力は、その力を盡くして、赤裸々に人間に肉迫した。一面は自然の生命の極度の緊張である。他面は即ち人間の生命の極度の切迫である。この二面の現象が、一時に掃蕩的に人間生活の大破壊となつて出現した。

而して、こゝでまた、自然の單純強烈な力は、その極度の緊張から、次第に鎮靜し、弛緩して行つた。自然の暴力が襲ひ迫つて來るのは、實に急激猛烈であるが、その引き上げて行くのも、また實に速い。眞に「盗人の如く」に去つて行く。

自然の生命が極度に緊張して、單純強烈なエレメンタルな力となつて發動するのは、自然の力が、その根本的な必要を異常の程度に於いて、謂はゞ痛感した場合である。その根柢的な要求に、謂はば目ざめて來た場合である。更に言ひかへて見れば、自然が命がけになつた場合である。自然はいつでも命がけだともいへるであらう。本質的にはさうであらう。しかし、自然は平生その本質的な力を、明白に人間の眼の前へ突きつけては來ない。或ひは、人間がさう感じないでゐる。少くとも、人間は、自然が單純強烈なエレメンタルな力で發動して來るときに、はじめて自然の命がけな力を

痛感する。

三三〇

そこで、自然の單純強烈なエレメンタルな力の發動は、——自然の命がけになつた力は、人間をも亦命がけにせずには措かない。人間の心もそれに呼應して、單純強烈なエレメンタルな力で動き出す。命がけになるといふのは、根本的な生命の必要乃至要求を、痛切に感得して、そこから心の力の發動して來ることを意味する。人間の心の力が、全力的に、赤裸々になるのである。人間の心がそのどん底へ引きつけられて行き、一切の意志が、そのどん底の要求に還元せしめられるのである。

大震と大火災とは、人々を、果たしてかくの如き心境に徹せしめなかつたであらうか。少くとも、かくの如き心境に向はしめなかつたであらうか。

二

自然の力の人間に對する肉迫は、一時のものに過ぎなかつたが、「青銅の騎士」のエウゲーニーは、そのために戀人と母とを奪はれ、自からも亦その分別正氣を失つた。彼にとつて、最も貴き殆ど凡てのものを失ひつくして、尙且つ殘るところは果たして何であつたか。それは、愛と、愛の對象を彼の生命の根柢の必要であつたのである。

大震と大火災とによつて、多くの人々は、平生保ち守らうとするところのもの殆どすべてを失つた。失はざるものと雖も、生活乃至生命にとつて、何が眞に重要緊切であるかを痛感せしめられたのである。單純強烈な自然の力の、赤裸々な肉迫に直面して、人間の生命の感じは、極度に緊張し逼迫せざるを得なかつたのである。自然の力が、命がけで迫つて來るのに對しては、人間の力も亦その生命の根本的な必要を、異常の程度に於いて、痛感せざるを得なかつたのである。

人間の心の動きは、よくも悪くも、正しくとも間違つてゐても、とにかくそれぞれ本氣で、命がけで、あけすけに現はれて來た。生命の感じの切迫は、そこまで人間の心を誘うて行つたのである。あらゆる過度の恐怖、それに伴ふ警戒、殺傷、殘虐、——それは單に生命財産の保留といふことのためであらうとも、謂はゆる國家の存榮、主義主張の貫徹といふやうな事のためであらうとも、すべてそれ等の極端な現はれは、皆いづれも生命の感じの緊張切迫に基づいて、人間の心が、露骨に發動した形である。またその他面に於いて、共存共濟の事實が、あの危急の唯中に在るもの

の間にも行はれ、平生に於いて到底経験しがたいほどの相互扶助の心持ちの溢れ充ちてゐたところのあつたのも、生命の感じの緊張切迫が、自のづから取らしめた道であつた。とにかく、自然の力の肉迫は、人間の心に、生命の感じを緊張せしめた。最も根柢的なもの、最も必要なもの、最も價値あるもの——少なくとも、それぞれの人々がさう考へるところのものに向つて、驀らに突進した。人々は、何等かの意味で、何等かの程度で、生命の感じの緊迫を深く経験した。即ち、自然の力の肉迫によつて、人々の心は、何等かの意味で、何等かの程度で、一層強くリヤリズムの傾向に往かざるを得なかつたのである。

プーシユキンの『青銅の騎士』で、青銅の騎士が、エウゲーニーを夜もすがら追ふといふのは、文字通りの意味でリヤリズムの描寫ではないかも知れぬ、しかし、あの半ば幻想的な描寫の中に、動かすべからざるリヤリズムの精神が儼存してゐる。それが、エウゲーニーの心理と、その對象となつてゐるピョートルの心理との交渉に於いて、眞に深く、相互の生命の感じに、切迫してゐるところのものがあるからである。その雙方の心理の交渉に、眞に命がけな、眞に根柢的に必要なものを、明らかに強く含んでゐるからである。

およそ生命の感じは、それが緊迫した境に在れば在るほど、直接的な、鋭敏な、必死なものとなる。

即ちリヤリスティックな心持ちになる。本来リヤリズムの精神は、必ずしも生命の切迫した境からのみ發生するといふわけではない。しかしながら、人間の生活の歴史が示すかぎりにおいて、生命に何等の窘束切迫の刺戟を與へないで、而かも尙リヤリズムの精神に徹することの出来るやうな世界は、まだ築き上げられてゐない。即ち何等の逼迫なしにリヤリスティックになるほどに、人間と人間の社會とは、まだ十分に成長してゐないのである。これを文學の歴史に就いて見ても、リヤリズムの精神の起こるのは、そこに何等か生命の感じに窘束切迫の刺戟の生じた場合である。リヤリズムはいつでも多少に拘らず苦澁である、憂鬱である、悲哀である。少くとも、それ等の暗影を壓倒するほどの官能的な歡喜快樂である。或ひはまた争闘であり、反抗である。否定でも、肯定でも、思ひ切つて、本氣で、その何れをもそれぞれに容れるのがリヤリズムの確かさ廣さである。ロシアの文學が、十九世紀の初めから、寧ろ主としてリヤリズムの精神をその主潮としてゐるのも、プーシユキンの如きがその父祖であるのも、ロシアに於いて、生命の窘束切迫を感すべき事情の多かつたといふことと、それを感ずる人々の心の力の強烈鋭敏豊富であつたといふことが、相助けて作り出した結果ではないであらうか。

何等かの力による生命の窘束切迫を、直接端的に、痛感するところに、眞の生命の感じが點火せられ、従つてリヤリズムの精神が深まり強まつて來ると言ひ得るなら、これをロシア最近の文學に就いて見ても、その種の事實を見出だすことが出来るのである。

千九百五、六年のロシアの革命は、ロシアの文學にとつて、生命の窘束切迫を、端的に痛感せしめたところの異變であつた。

いふまでもなく、革命の精神は、既定の價値の顛倒である。生活に對する新見地からの大膽な根本的な批評である。千九百五、六年の革命は、事實の上で失敗に終つたが、しかし、革命の精神氣分は、これによつて弘く流布せられた。革命を中心として、これに對する程度の問題が、人々の必至の興味となつた。中んづく當時のインテリゲンツィヤは、實際の事實として生起した革命に對する自己の態度を、從來の立場からも、明確に決定すべき必要に迫られた。革命の實際運動に、参加するとせざるとにかゝはらず、これを自己の切實な問題として、この一大事實と交渉するところの自己に、何等かの意味で是認の道を見出だすべき必要に迫られた。そもそも革命の意義は如何、革

命による多くの犠牲の意義は如何、或ひは理想のためといひ、或ひは未來の新社會のためといふものと、自己の、再び繰り返さるまじき生命との關係は如何、多數のための個々人の生命の意義は如何、——これ等はすべて新たな疑問となつて人々の心を打つた。即ち人生そのものの價値乃至意義について、自他の交渉關係について、何等かの根本的な解決を求めざるを得なかつた。その或るものは宗教に往き、宗教の基礎に於いてのみ革命を是認し、魂の解放としての革命を唱へ、靈の復活の新時代を開き來たるものとして革命に賛成した。メレジュコフスキー一派の求神派の思想がそれである。またあるものは、革命が、豫期の結果を達成しがたきことに失望し、革命運動の大渦巻の中に在つては、自己の弱小微細なる一分子に過ぎることを發見し、決定的な力を有せざることを感じて、社會的協力運動の興味よりは、寧ろ退いて個人の問題、自己の問題、而してまた人生根本の運命の問題に専念するに至つた。即ちその意味での革命の否定者、少なくとも革命への背反者である。アンドリーエフの如きがそれである。

アンドリーエフによれば、人生は運命であり、神祕である。狂氣と恐怖とは到るところに在つて、人間は悉く自由を有せない。或るものは情慾煩惱の深淵に陥つて、到底浮び出ることには出来ない。思想そのものさへ人間に反く。個人の意識にも自のづから限りがあつて、他の人間の心は到底

不可知の世界である。自から作り出だしたものでなく、變へることも出来ない固定の思想の力のしかゝつて来る。人間は生存の理法の奴隷であつて、而かも自から宇宙を抱擁すると迷信してゐるのだ。それを四方八方に高く天を劃つて聳え立つ壁のあることを知らないからである。そこには自然の法則の壁がある。心理の法則の壁がある。また運命の壁がある。不可知の恐怖の壁がある。或ひは近代文明の壁があつて、個人の創造力を粉碎する。更に人間のさまざまの制度の壁が並び立つてゐる。憎悪や壓迫や争ひの壁である。更に老衰の壁があり、最後に壁の中の壁なる死の壁がある。アンドリューエフの短篇「壁」は、この運命觀の象徴である。「深淵」も、「アナテマ」も、「人の一生」も、「思想」も、「黒い假面」も、「知事」も、乃至「大洋」も、すべてアンドリューエフの思想態度を鮮やかに示すところの作品である。

自我の執着、自我の慾望の充足、自我の生存の主張から、革命を否定するのはアルツイパーシエフである。革命の英雄主義、その興奮、その慘苦悲痛、乃至その殘虐、それ等もすべて空である。希望と現實との矛盾を觀來たれば、犠牲の死の怖ろしさ空しさを感じられる。他のため乃至理想のためといふのは夢にひとしく、たゞ自我の独自の生存があるのみである。自我の生命の緊張充實があるのみである。そのためにのみ、一切は認容せらるべきである。死の恐怖否定と、生の高唱。肉の

力による現實生活の享受、その享受力の豐滿の讚仰。この思想は「サーニン」にも「ランデの死」にも明らかに見える。

アンドリューエフとアルツイパーシエフとは、わづかに一部分の例に過ぎない。これ等は何れもそれぞれの意味で結局革命を否定してゐる。少くとも革命に對して冷淡無頓着になつてゐる。一つは運命觀的であり、一つは自我中心的であるが、とにかく自己の生活が中心題目となつてゐることは共通である、たゞ一つは運命乃至心の力といふ方面が主であり、一つは肉の生活が主であるところに相違がある。いづれも革命乃至その氣運の刺戟が、生命に異常の窘束切迫を感じしめて、生命の感じが鋭く點火せられ、おのおのの往くべき生命のリヤリティーに到達したものであると見られる。いづれも、切迫した生命の感じに出發して、何等か命がけな力を含んでゐる點に於いては一つである。いづれも、二十世紀のロシア文學に於けるリヤリズムの精神に根深く立つところのものである。生命に直接して、その深き實感から、何等かの生の中心意義を把握して來たらうとしてゐる點に於いて、十分なリヤリズムの根據に立つものであると言ひ得るのである。

四

エウゲーニーの幻想的な主観の中に、彼の生命にとつての眞のリアリティーが見出だされる。自然の暴力の切迫が、生命の感じを、そこまで突き詰めて行つたのである。

アンドリーエフは人間の魂の世界、運命の世界に、アルツイバーシエフは性と死との問題に、特に生命の焦點を求めた。革命といふエレメンタルな力の切迫が、生命の感じを、そこまで突き詰めて行つたのである。

大震と大火災とも、たしかに生命の窘束を感じしめる力の切迫であつた。もし、その力の切迫が、文學の方面にもやがてまた影響するとすれば、それはやはり、生命の感じを、更に突き詰めて行くための力とならねばならぬ。一層強く生命の焦點を求め、一層深く眞のリアリティーに徹する心として現はれて來べきである。それはリヤリズムの精神の高調に達することである。生命感の點火、リヤリズムの徹底、そこに生命に迫る破壊力の、否定による肯定の力が在る。(二二・一〇)

新時代の豫感

われはこの世に來れり、太陽を見んがために、また青き地平線を。

われはこの世に來れり、太陽を見んがために、また山の頂を。

われはこの世に來れり、海を見んがために、また谷の咲きほこる花を。

われは一瞬の中に世界を收めたり、われは王者なり。

われは幻を創造して、冷たき忘却を征服したり。

われはおのおのの刹那に啓示に充ち、常にうたふ。

わが幻を苦難は呼びさませり、されどわれはその故に愛せらる。

誰かわが歌ふ力に並ぶものぞ、

何人もなし、何人もなし。

われはこの世に來れり、太陽を見んがために。

されど、もし日消えなば、

われはうたはん……われは太陽のうたをうたはん、臨終の時まで！ (太田義照氏の譯)

この詩は、パリモントの作として、よく知られてゐるものの一つである。この詩を読む人は、それが現實の政治問題や社會問題とは全く没交渉であることを斷るまでもなく知るであらう。この詩の中には、人を教へようとしたりするところは見えない。現實を何とかして改革しようとか破壊しようとかいふやうな社會運動家らしい考へなどは歌つてゐない。この詩は、現實の物質的な生活の惡を憤る心持ちを歌つてもゐない。現實の惡を憤らしめることを詩人の仕事とは考へてゐない人の作つた詩である。そこには明らかな自己讚美がある。自己の力による創造の歡びと誇りとがある。自己を王者とし征服者として最高の位置に置く自負心がある。要するに自然と人生とに於ける勝利者としての詩人の自己讚美である。この詩の心持ちは、労働者の生活や、その運動や、革命などのことを考へる心持ちからは、甚だかけ離れたもののやうである。さういふものは、全く視野の外に置いてゐる心持ちである。

パリモントには、『われ等太陽の如くあらん』といふ有名な詩がある。太陽は、彼にとつては、世界の創造力の根源である。一切の生命を與ふるものである。日本は、パリモントに於いては、日本即ち太陽の根源である。太陽を崇拜讚仰するのと同じやうな心持ちで、パリモントはよく火をう

たひ焰をうたふ。火は淨める力である。美しく、耀かしく、生きてゐる。而して同時に、それは運命的な力を有してゐる。抵抗すべからざる支配力を有してゐる。またそれは、無限の不斷の變化の姿である。およそパリモンに從へば、詩はそもそも無限の不斷の變化の象徴である。パリモンは刹那を愛する。その生活は急速であつて、變化してやまない。おのおのの刹那に自己の一切を投げ出す。刹那はまた次から次へと新しい世界を展開する。「新らしき花はとこしへにわが前に花さきつゝある。」「昨日」は永久にわかれ去つて、知られざる「明日」へ「明日」へと無限に進む。パリモントのよく歌ふのは空である、太陽である。沈黙である。透明な光りである。過ぎ去り行くものの姿である。而して要するに、すべての限りあるものの限りを超えた世界である。その象徴は生命の根源としての太陽である。炎である。而してまた匕首である。

二

もの倦い、いち悪い大地、

だが私にとつてはやはり生みの母だ！

おん身を愛します、おゝ嘔の母よ、

もの倦い、いち悪い大地！

大地に身をかゝめ、五月のまどはしの中に、

大地を抱くはいかにこゝろよきことよ！

もの倦い、いち悪い大地、

だが私にとつてはやはり生みの母だ！

愛せよ、人々よ、大地を、——大地を、

濕つばい草の緑の祕密の中に、

ひめられた啓示を私はきく。

愛せよ、人々よ、大地を、——大地を、

またそのすべての毒のあまさを——

土なるもの、蒙くもきもの、すべてをうけ入れ、

愛せよ、人々よ、大地を、——大地を。

濕つばい草の緑の祕密の中に。(黒田辰男氏の譯)

これはソログロブの詩の一節である。これこそは、ロシアの詩人ブリーソフの言つてゐるやうに、現實と想像との二つの世界の中に、眼に見えるものと夢との間に、實人生と空想との間に、一線を劃することの出来ない境地である。吾等が想像と考へなれてゐたところのものが、世界の最高の實在であるかも知れず、何人も現實として確かに受け入れられてゐたところのものが、最もひどい迷妄幻想に過ぎないかも知れないやうな——さういふ世界に住むものの心持ちである。そこにはまさまざしい分りきつた現實の代りに、複雑な特殊の現實が造り出されてゐる。而かもその見えない聞きなれない現實が、却つてはるかに眞實の現實であるやうにさへ感ぜられる。しみじみと、自然にさう感ぜられる。

この詩を読むと、人が詩によつて人生の神祕的な現實を求めるといふ意味が思ひ出される。詩の目的が、人間の心を、眼に見える可現の世界の上にとゞよふ神祕の方に近づかしめるところに在るといふのが思ひ出される。詩のうちに人生の永遠の實相があるといふのが思ひ出される。

三

詩は直接に社會問題のために、その宣傳のための軍歌となるものではない。またもとよりたゞの

快樂のためのものでもない。また單に人間の思想感情をうたふといふだけのものでもない。詩は常に必ずどこかに神聖な光りを帯びてゐる。人間の魂の解放のための戦ひに於いて(そのために人生の凡ての營みが行はれてゐるのだが)その最も鋭敏な力強い光りとなつてくれるものが詩である。人間の魂は、いつでも地上の土に反いて戦つてゐる。詩はその戦ひの上に勝利の道を示す光りである。あくまでも内面の法則のための光りである。未知の生活の現實を照らす光りである。——パリモントやソログロブの詩に對する心持ちはかういふところにある。

人間の思想や行爲は過ぎ去つて消えて行く。しかし消え失せずして生き残つて行くものがたゞ一つある。それは人々がいつでもむなしき夢と言つてゐるものである。地上のものでない何ものかに憧れ求めて行く漠然たる心持ちである。何處かに向つて往かうとするもがきである。既に在るところのものに對する憎みである。未だ在らざるところの神聖なるものを待ち望む不安の光りである。またそれに對する燃えるやうな求めである。これこそは決して消え亡せてしまはないであらう。新しい、未だ知られない世界は、遠くの方にかすかにほの見えてゐる。それはまだ存在はしてゐない、しかしそれは永遠のものである。——このやうな世界を招き來るものは詩である。詩の魔術である。自然はたゞ生存の核を與へる。自然の作るものは未完成のばらばらの小さな怪物のやうなも

のである。しかしこの世界には魔術師がある。それはその歌の力で、この生存の圏を廣め且つ豊富にする。それは自然の未完成を完成して、その怪物に美しい顔貌を與へる。自然の一つ一つは断片で、詩人の心がそれを綜合して生かす。それが詩人の力である。——パリモンには「魔術としての詩歌」といふ論文がある。

ソログープとパリモンとは、十九世紀の終りから二十世紀の初めへかけての二十年前後に於ける、ロシアの新詩壇の先達である。この時代に、ロシア文學は、その題材の上からも技巧の上からも、著しく複雑多様になつた。その中でも、パリモンやソログープによつて代表せられる新ロマンティズムの一派、即ち謂はゆるモデルニスト(晩近派)の一派は、その思想の傾向に於いて主として超現實的であつて、ロシア文學がいつでも無視して通り過ぎることの出来なかつた政治的、社會的生活の現實からは、全くかけ離れた特異の世界を築き上げて來た趣きがある。多くの人々のためにする社會革命の運動からは、ひとへに自我の讃仰を高唱するパリモンの心境は甚だ遠いものである。正義公正のために闘はうとする社會運動は、惡魔の力を讃美するソログープの心境からは甚だかけ離れたものである。これ等の詩人は、すべて善惡の彼岸に立つて、悲しみなく憂ひなき唯美の宗教を信奉するものである。その最も著しい色調は個人主義的の自我の色であつて、隨つて超

道德的、超政治的、乃至超社會的の態度を取る。

唯美の福音を説く純藝術派ともいふべきこれ等の人々の心境は、十九世紀の終りの不安な社會的空氣の間から、自然に芽ぐんで來たのである。千八百九十年代のロシアは、急速な生活の變化を見た。生活の中心は、田園の怠惰な地主から、近代的な都市の労働者の方へ移動して來た。生活の中心が農村から都會へ移るとともに、職業的な、事務的な、繁忙な、目まぐるしさが増し、生活が一般に智力的に緊張して來た。そこには機械の力が人間の力を壓する生活が始まつた。生活の歩調は今までよりもずつと急速になり、個人の經驗もまた急速に變化し、複雑になつて來た。疲勞と、強烈な刺戟による慰安とが相錯綜して神經的な氣分を一層深めた。その一方で、新時代に向つて進まうとする感情は、依然として壓迫せられてゐた。謂はゆる「惡化」しようとする新時代への抑壓が、それ等の人々を「黒い固い壁」に衝き當らしめた。そこに黒い固い現實の壁からの回避の氣分が生ずる。藝術は現實の争闘の上に超越して存在する世界となる。魂を憎みのために盡くすのは、人間の生命の冗費である。魂の世界は守られねばならぬ。黒い固い現實の壁の此方には、更にそれを隔てる詩の魔術の圏がある。さうでなければ、その黒い固い現實の壁の内部に於いて、何等かの善を、美を見出だすほかはない。それによつて生活がはじめて可能となる。要するに、眞の價値は、思想

と空想との世界にのみ存在する。これが新ロマンティズムの一派に共通の主張である。

四

新ロマンティズムの一派と殆ど時を同じくしてゐながら、大膽な現實の觀察によつて新らしい天地を開拓して來たレヤリズムの一派がある。たとへばゴリキーの如きがその一人である。ゴリキーの多くの作の中に、たとへば『二十六人の男と一人の女』といふのがある。ビスケット工場ビスケット工場の二十六人の職人は、地下室で朝から晩まで働いてゐる。その二階にある縫箔工場へ通つて來る女工のターニャといふ娘がある。

凡ての人間が愛したり保護したりせずにはゐられない。美しいものは、亂暴な人間どもの間でさへ、敬意を抱かせる。自分等の囚人のやうな生活が、自分等を鈍い牛のやうにしてしまつたが、それでも自分等は、まだ人間たることを失はなかつた。それで、あらゆる他の人間と同じやうに、何かにか崇拜しないではゐられなかつた。自分等——即ち二十六人の職人どもは、そのターニャといふ娘よりほかにすぐれたものを持つてゐなかつた。またその娘以外、害またに住んでゐる自分たちをふりむいてくれる人も實際なかつたのだ。——これがその職人どもの心持ちであつた。そこで彼等は

その娘にいろいろ親切をつくす。氣をつけてやる。厚着をしるとか、あまり急いで階段を駆け上るなどか忠告する。娘はしかしその言ふ通りにもしなかつた。それでも彼等は腹も立てなかつた。彼等はいろいろ手助けをしてやる。それを自慢にして、われがちに手助けをしてやる。實際ゴリキーの言つてゐるやうに、人間といふものは、いつでも誰かを可愛がらずにはゐられないものである。たとひその愛の重さのために、相手を押し潰すやうなことがあり、相手を取りかへしのつかないやうなものにすることがあつても。

二十六人の職人の働いてゐる害のやうなパン製造所の壁一つ隔て、別の白パンの製造所があつて、主人はどちらも同じだが、そこには四人の職人が働いてゐた。その四人はいつもよそよそしく、自分たちを一段上手に考へて威張つてゐた。工場も日當りがよく、廣くて、そのくせ四人はよくなまけてゐた。二十六人の方はいつも日當りの悪い室で働いてゐるので、顔色が黄色で、血色が一體によくなかつた。二十六人のうちの三人は肺病か何かで、一人はリョーマチで、それに身なりも一體にずつと悪かつた。四人の職人の方の監督が酒をくらつて、追つ拂はれて、軍人上りの男が新しく雇はれて來た。しやれたチヨッキを着て、金ぐさりをつけて、一寸男前がよくて女たらしだといふのを自慢にしてゐるやうな男である。二十六人の腹では、ターニャだけはあんな野郎に疵ものにさ

せたくない。そのために仲間でも口論までする。皆で氣をつけようといふことになる。一と月たった。その軍人上りが二十六人のところへ来て女たらしの自慢をする。二十六人の一人が、小さな樵を倒すのは力自慢にはならぬ、伸び切った松の木を倒すのは別だからといふ。軍人上りが言ひ募つて、それでは二週間のうちにターニヤを手に入れて見せると約束する。いよいよその二週間目の日になる。ターニヤはいつものやうに来る。二十六人は皆無言で、いつもより引きしまつた心持ちで迎へる。ターニヤは驚いて顔色が變る。無理に落ちつけて、早くビスケットをお呉れよ、とわざと荒つぽく言ふ。何となく感づかれたやうな心持ちで急いで階段を上つてしまふ。二十六人は、軍人上りの男が勝つたなと思ふ。皆何となく心細く感ずる。十二時になつて軍人上りが、いつもよりめかしてやつて来る。二十六人に、納屋へ来て覗いてゐろといふ。板壁の隙間から覗いてゐると、ターニヤが心配さうに庭を通り抜ける。口笛を吹き吹き軍人上りが来る。あひびきの場所へ行くのだ。じめじめした灰色の日で、小雨がふつてゐる。雪はまだ屋根の上に残つてゐる。地面にもところどころまばらに残つてゐる。屋根の上の雪は一面に煤をかぶつてゐる。二十六人は何だかターニヤに腹が立つ。やがてターニヤが歸つて行く。幸福と嬉しさで眼がきらきらしてゐる。唇には微笑が浮んでゐる。危かしい足どりで夢中で歩いてゐる。もう我慢が出来なくなつて、二十六人の男たちは、不意

に、どつと戸口から中庭へ出て、ターニヤにさんざん毒口をたゞく。女はふるへて、雪どけの泥の中へ立ちすくんでしまふ。眞蒼になる。眼はうつろに、胸を波立たせ唇はふるへてゐる。まるで狩り立てられた獣のやうに。荒々しい眼つきで二十六人の方を、全身をぶるぶるとふるはせながら、眺めてゐる。

二十六人のうちの一人がターニヤの袖を引つばつた。女の眼が光つた。女は両手を頭へゆつくりと上げ、髪のはつれを直して二十六人の方をちつと見た。そして、甲高い落ちついた聲で、見すばらしい懲役人どもめと言つて、つかつかと二十六人の方へ歩み寄つて来た。二十六人の男どもがその前に立つてゐなかつたかのやうに、さつさと歩み寄つて来た。二十六人は立ち塞がつてゐられなかつた。女はあとも見ずに向うへ行きながら、大聲で、悪黨どもめ、とか何とか言ひながら行つてしまふ。

二十六人の男どもは、灰色の空の下に、雨と泥たまりとの中に立つてゐた。黙つて、灰色の石の審へ歸つた。前のやうに、太陽は一度も二十六人のゐる窓からは覗かなかつた。そしてそこには、ターニヤはもうゐなかつた。

ゴリキーの現實描寫には、民衆の——放浪者や労働者などの有してゐる潜勢力が表現せられてゐる。民衆の生命力が暗示せられてゐる。彼等はやはり生活に對する貪るやうな慾望を抱いてゐる。抑壓せられながら、生きようとする意志が逞ましく動いてゐる。「二十六人の男と一人の女」では、その生命力は、何ものかを眞に、純粹な心持ちから愛せずにはゐられないといふところに動いてゐるのである。自分たちの純粹な心持ちから愛してゐるものが、無残にやすやすと傷けられて行く醜さと淺猿しさに對する憤慨と悲しみとのうちにあらはれてゐるのである。ゴリキーがよく描く飢ゑた大膽な人間、世間のあふれものではあるが、大膽で、奴隷のやうな心持ちでなく、人生の主のやうな心持ちで生きてゐる人間、一切の文明の欺きの手の届かない自由人、大膽で、皮肉で、傲然たる、襤褸の超人、たとへば、人に何にもいゝことをしてやらないのは、悪いことをしてゐるのだ（『どん底』第二幕）といひ、自分で自分を尊敬しなくてはいけないといひ、嘘は奴隷と君主との宗教だ、眞實は自由な人間の神だ（『どん底』第四幕）といふ『どん底』のサティン、——あの人間たちの心には、サティンの言つてゐるやうに、人間は凡てを含んでゐる、人間のために凡てのものが在る

のだ、本當に在るものは人間ばかりだ、人間以外はみんな人間の作つたものだ、すてきな、尊敬すべきものは人間である、それは侮つたり同情したりすべきものではない、人間に怖いものは何もないといふ、大膽な深刻な人間の肯定がある。そこには生の勝利を信する深い肯定があるとともに、一切を正しい組織に立て直さずにはゐられない革命の意志がある。この點で、パリモンとヤソログープの世界とは全く別種の感じを與へる。群衆の侮蔑は、こゝでは群衆のうちにある未來を胎むものへの讚美とさへなつてゐる。パリモンとヤソログープは、自己の世界に立てこもつて、貴族的な個の心境を立て貫かうとするもののやうに見える。ゴリキーは、凡ての人間の中に潜んでゐる、まだ現はれない生命の力を、二十六人の職工のうちにも、『どん底』に住むあふれものの中にも見出だす。

この同時代に現れた二つの傾向は、殆ど相反對するものやうにさへ見える。一はレヤリズムで革命的である。他はネオ・ロマンティズムで超革命的である。一は反貴族的であつて、他は貴族的である。しかしながら、この一見相對立するやうに見える二つの傾向の間にも、それを一貫して、根深く横はつてゐるところの共通の精神がある。ゴリキーの人間讚美、人間の潜勢力の高唱、生の力の勝利の確信、これ等は、パリモントの太陽のごとくあらんとする願ひと、その炎の如く嵐の

如き情熱と、ソログープの悪魔の讚美とあはせて、いづれも在來の固定停滞せる生活に對する反抗である。凡庸の安定に對する挑戰である。灰色の、乾固まつたやうな現實のブルジョワジーの生活氣分に對する否定である。要するに、何等かの正しく、善き、強く、美しき未現の生活のために、何もか固定せる無生命の暴虐に向つて挑戰するところの、熱烈不安な精神が發動してゐる。現前の固定停滞せる現實への否定、凡庸にして満足せる現實への反逆、何れにしても、その停滞と満足との現實よりも、遙かに高く、遙かに遠く、乃至また遙かに深く、生命の沖り且つ潜むべきところを求め、心の表現である。その表現の個々に著しい差はあつても、そこには、一層深く現實を観るところに眞の生命の力を見出ださうとする新しいレヤリズムの精神がある。またそこには、現實を超越したところに眞の生命の力を感得しようとする新ロマンティズムの精神がある。何れも、異常の要求である。抜本的な異常のうちに、眞の生命の力を見出ださうとする要求である。空想と見え、實現不可能と見えるあらゆる事物が、必ずしも實現不可能でなく、空想でなく感ぜられて來るのは、この要求の心境に立つものにとつては自然である。

かやうな意味で、新ロマンティズムと新レヤリズムとは、共通の精神がある。それは一面から言へば、やがて來たるべき新時代に對する、鋭敏な天才の心の底深く感ぜられるところの豫感である。新時代の精神に對する生命の豫感である。新ロマンティズムの複雑な個性の表現と、新レヤリズムの大膽にして多方面な現實の探求と、これ等は一見して中心なき混沌のやうに見えながら、その一切の動搖と不安と、反抗と破壊とのさまざまの姿の間に、これを貫く白金の線を一線に明らかに認めることが出来る。それは最も大膽な空想ほど、最も切實な現實であるといふ豫感である。未現を現實にせずには措かない意志の表白としての、新時代の豫感である。(一三・一)

革命後のサキエート文壇

いつであつたか、フセヲロド・イワノフが、私に向つて言つたことがある。それは、彼の言葉で言へば、「われわれは自分の讀者を知つてゐない」といふのであつた。「そのことが、われわれの困つてゐる點だ」といふのであつた。

イワノフは、今のサキエート・ロシヤの文壇では、革命の後に出版した多くの小説家の中でも、最も豊富な才分を有するものとして認められてゐる一人である。彼の作品は、この二三年の間に、幾度も違つた出版者の手で賣り出されてゐるし、現在のサキエート・ロシヤ小説家の中では、恐らく最もひろく讀まれてゐるものの部類に屬する。

革命前の文壇では、小説家の讀者がどういふ種類の人たちであるかといふことは、ほど見當が立てられた。最も多いのは勿論男女の學生、それから讀書するインテリゲンツィヤの一部、専門の文學研究者、批評家といふやうな順序であつた。それが、革命後の今日では、學生のたねも全く一變してしまつた。ラブ・ファクと略稱せられてゐる、労働者兵士もしくはその子弟たちが大學に進むための高等豫備教育を行ふ學校の學生たちは勿論、そこから進んで來た大學生にしても、革命前のものとは殆ど全くその素質を異にしてしまつてゐる。その上その學生たちは極端に貧乏で（尤も、革命

前の學生も貧乏では有名であつたが、それでも今のほどではなかつた）とても書物を新らしく買つたりする財力は持つてゐない。今までのインテリゲンツィヤもこれに劣らず貧乏で、その上最も悪いことには時代の激動の打撃で氣力が弱り込んでしまつて、或ひは反動的にさへなつてゐるから、革命後に新らしく出た小説家などに對しては、あたまから反感を持つたり小馬鹿にしたりしてゐて、貧乏な中からわざわざ買つて讀まうなどといふ心の動きやうがない。最後に文學専門の研究者や批評家であるが、これ等の人たちはさすがに新文學に對して全く冷淡ではゐられない。しかし購買力のない點から言へば、一般のインテリゲンツィヤ同様である。かう考へて來ると、自分たちの作品が出版せられたところで、一體誰が讀んでくれるのか、見當がつかないといふことになる。——これがイワノフの、もしくはイワノフたち現在のサキエート・ロシヤの小説家の、「困つてゐる」といふ意味である。

讀者などは一人もなくても文藝は成り立つといふやうな、勇敢といふよりはドン・キホーテ式の宣言を取てしかねない人のゐる國の文壇では、作者が自分の讀者について見當が立たないといふくら

ゐのことは、少しも困るほどのことではないかも知れない。寧ろさういふ點で困つたり、それを問題にすることそれ自身が、藝術家としての心事の墮落であつて、そんなことは俗衆相手の通俗小説家でも考へさうなことである。眞の藝術家は、たゞ自己の藝術的感興にまかせて創作すべきのみ、讀者を眼中に置く必要などは少しもないと謂ふかも知れない。しかしながら、あれだけの社會的變動を経験して來てゐる現在のサキエート・ロシヤでは、文學を社會的の一要因として見、文學の社會的職能を重大視し、隨つて文學と社會との交渉を氣にせずにはゐられないのである。どういふ種類の人たちが自分の作品に興味を持つてくれるかといふ見當のつかないために、何となく頼りない感じを抱くといふのは、自分の力の働きかける對象を明らかにし得ない寂しさである。この寂しさは、事後、——即ち作品は出版せられたが、それがどんな人たちに讀まれてゐるか分らないといふ意味ばかりには解せられない。文學を一つの社會現象として、而かも社會の心理に思想傾向に働きかけるところの有力な職能あるものとして、その中に含まれる思想傾向に就いてやかましく批判を加へてゐる現在のサキエート・ロシヤでは、——文學を無産階級の争鬭の意志の表現として見ようとさへするところでは、その文學上の作品が、少なくともどういふ思想傾向を有する人たちのために作られたものであるかの見當が立つてゐないといふことは、一方作者自身の思想的立ち場の不明確を語るものとして、その脚場のしつかりしてゐないといふ意味から——即ち事前に於いて既に自ら頼りなく思ふべき性質を十分に有してゐると解せられる。

イワノフやピリニャクが、「革命の隨行者」として見られ、眞にロシヤ革命の精神を具體現するものと考へられてゐないのも、もとよりこの「事前の寂しさ」の意味に於いてはやむを得ないと言はねばなるまい(こゝへピリニャクの名前を突然持ち出したのは、一つは、そのイワノフの話の折に、彼もそこに居合せて、イワノフの言葉に同意であつたと記憶するからである)。

イワノフの言葉の意味が、あの場合、私のいふところの「事前」と「事後」との二つの意味を含めて、それを意識してゐたかどうかは分らない。しかし彼の平生から察して、おそらく「事前」の意味——自分たちの思想的立ち場の不明確に基づく讀者の見うしなひの寂しさといふやうな意味を含んではゐなかつたものと解してよい。併しその如何に拘らず、あの場合のイワノフの言葉をつきつめて解釋して行くと、たまたまそこまで觸れて來なければならぬことになるのである。少なくとも、現在のサキエート・ロシヤの文壇の雰圍氣の中にイワノフを置いて考へて見るかぎりには、

去年（一九二五年）一月十八日、私がモスクワから無理やり追ひ立てられるやうにしてリガへ着いてからの丁度十日目に、モスクワでは全聯邦無産階級文學者大會が開かれた。その大會でのデミヤン・ペードヌィの演説の大意が、モスクワの新聞に出てゐたのを、偶然後になつて見た。その中には、無産階級文學が、讀者を眼中に置かなければならないといふことを力説してゐたと記憶する。ひとりこの場合に限らず、およそ革命後の新文學即ち無産階級文學に就いて論ぜられる場合、それが無産階級の立場からの主張言説であるかぎり、必ず「讀者を忘るゝなかれ」といふ意味が附け加へられないことはないほどである。

文學の歴史的研究ですら、「讀者」といふものは多く無視せられて、「作者」のことばかりになつてゐる。文學と「讀者」との交渉は、いろいろの意味に解釋もせられるし、これだけで一つの論究の題目になり得るが、とにかくその「讀者」の問題が、ひろく「大衆」を相手にせねばならぬといふ意味からも、また特に文學に含まれる思想的傾向の讀者に及ぼす影響効果といふ意味からも、現在のサキエート・ロシヤの文壇で、陰に陽に人々の意識を刺戟しつゝあることは事實である。通俗小説の類は特に讀者を眼中に置くと謂はれてゐるが、有意識的にか無意識的にか、何れにせよ全く讀者を眼中に置かない文學などの存立しよう筈もない。そんなことはこゝで今さら問題にするまでも

ない。またかりに物好きな人があつて問題にしろと言はれたとて、この場合その概論を説いてはゐられない。しかし、もし大ざつばに見て、無産階級文學もしくはひろく言つて革命後のサキエート・ロシヤの文學が、讀者をしきりに問題にしてゐる一方に、世間のいはゆる通俗小説もまた「事前」にも「事後」にも讀者のことを氣にかけてゐるとすれば、この二つの場合に互る共通の一現象はそもそも何を意味するか。この問題はまた別に纏めて論ずる折があらうから、こゝではこれ以上道くさを喰はないで置く。たゞ、世間のいはゆる通俗小説の場合では、氣にはするもののその讀者の内容素質が大體は分つてゐるから、作者はその既存の讀者の興味に合わせて行けばよいのであつて、その作品と讀者との關係に就いて今さら面倒な議論は起らないのである。然るに無産階級文學もしくは革命後のサキエート・ロシヤの文學のやうな場合では、イワノフの言ふやうに、全く讀者の素質について明確な見當の立てにくいやうなところがあるので、氣にはなるが、自然作者の方で自分を向うへ合せて行くといふよりは、自分の持ち前を出して見るか、自分の信するところを出して行く。讀者の方でも社會の動搖分裂してゐる大きな過渡時代のことだから、思想の先頭にあるものと後方にあるものとは甚しく違つてゐて、その間の選擇是非に著しい距離がある。讀者と作品との交渉關係が穩やかにはすまない。文句が多くなる。随つて批評が盛んになる。つまり文學の社會性が高い

程度に於いて認められ、その社會性の意識が鋭く、その社會性の方向の分岐するによつてお互ひに黙過してゐられなくなる。あるものは文學と讀者との關係交渉(文學の社會性)を左に導かうとし、あるものはまたそれを右に往かしめようとする。文學の眞の社會性(文學と讀者との關係交渉)をその左と右との孰れの位置に定むべきかの問題が安定を得ない。批評上の論争が多くなり、作者のあるものは、この意味でも、單に購買力の有無といふやうな點からばかりでなく、自分の讀者の所在(言ひかへれば自分の文學上の作品の社會思想上の位置)を見失ふことになりがちである。

サキエート・ロシヤの文壇は、この意味でも混亂から抜け切つてゐない。批評上の論争の盛んなのは、この點から見て當然自然の結果であるといはねばならぬ。

サキエート・ロシヤの文壇に於いて、あらゆる方面からの興味の中心となつてゐるものは、文學批評上の諸問題である。このことは既に他の場合に於いても幾度か言つて置いたと思ふが、現在のサキエート・ロシヤ文壇を説く場合に、この現象を見のがすわけには行かない。

批評の問題は、ひろい意味では要するに文學の社會性の問題に歸着する。

一方では、文學の成立を専らその内在的機構の方面から解釋しようとする。いはゆる形式主義派の批評である。

それに對して、文學を一つの社會的現象と觀て、その成立の原因を社會組織中んづく生産の關係状態にまで探り求めようとする。いはゆるマルクス派の批評である。

勿論、形式主義派の批評が、その理論の上からまだ十分な系統を立ててゐないやうに、マルクス派の批評もまた、理論上幾多の未考究の地を残してゐる。

しかしながら、マルクス派の批評は、もしくはひろくマルクス派の文藝論は、十分な意味で、わづかに最近のロシヤにその端を發したと言つてよいのである。ロシヤに於けるマルクス學者の父ともいふべきプレハーノフによつて、はじめて唯物史觀に立脚するところの藝術論の根本が打ち立てられ、また何ほどの細目に互る解説が残されたと言つてよいのである。今日のマルクス派の文學論乃至批評は、悉くこのプレハーノフを祖述し、補説するところに成り立つものである。

革命後無産階級の勝利によつて、無産階級文學の問題が、單に理論としてばかりでなく、事實の上の問題として考察せられる必要に迫られるとともに、マルクス派の文學論乃至藝術論の問題も、ひろく且つ細密に考究せられなければならなくなつたのである。随つて、この派の文學論乃至藝術

論としても、その大要に互つてすら今尙幾多の未解決の問題を残してゐて、現在批評壇の論争は、單にマルクス派の批評と形式主義派の批評の對立といふやうな簡単な形に於いてではなく、同じマルクス派の批評家と目せられるべき人々の間に於いて、寧ろ一層烈しい論戦が行はれることさへ珍らしくないのである。

マルクス派の文學論乃至藝術論が、ブレハーノフの打ち立てた基礎によつて、自から漸く整頓しようとしてゐる一つの兆候とも見るべきものは、この一二年來頻出するところの、マルクス派文學論乃至藝術論に關する各方面からの文献の蒐集編纂である。この派の文學論乃至藝術論の整頓組織は、今後恐らくは幾十年にも互つて、サキエート・ロシヤの批評家、文學研究者乃至美學者の仕事となるであらう。この見地による文學史の大成は、サキエート・ロシヤ文學史家の差し當つて着手すべき仕事でなくてはならぬ。

マルクス派の批評は、たしかに文學論上の一新地を拓くものである。私はその明快な見解に殆ど同意せざるを得ないものである。それと同時に、今までに説かれてゐるマルクス派の文學論だけでは、まだ十分に説きつくし得ない幾多の問題をも見出だす。それがマルクス派の立ち場からは遂に説明し得ないものであるか、この派の文學論が創設後日淺くして、或ひはまだそこまで手が届かぬ

いのであるか、それ等の點についても論はいかやうにもあり得よう。しかし、いはゆる形式主義派の内在批評が、マルクス派の批評の先行條件として成り立たねばならないことと、マルクス派の文學論の根本思想が、實際の文學上の問題を解釋するに當つて、尙多くの曲折を経て、その自由な屈折性乃至伸長性を發揮しなければならぬことは、こゝで明らかにことわつて置いてもよいのである。

革命はあらゆる方面に自分を表現することを急ぐ。文學の上でもまたその例に洩れない。革命とともに、出現した詩人小説家の數は夥しいものである。ウラヂスラーウレフ編纂の文學索引によつて、革命後に出現した詩人小説家だけを算へ上げて見ても百人にあまるのである。而かもこの中には、千九百二十三年の暮から後に出て來た人たちの名は全くない。それを加へ、その上にこの索引に洩れた多くの小詩人などを算へたら、その總數は百五十を十分超過するであらう。しかしながら、それ等多數の人々の中で、文壇一時の客たるに過ぎない人々と然らざる人々とを識別することだけでも容易の仕事ではあるまい。革命後のサキエート・ロシヤの文壇は、その範圍の擴大せられ、

材料の過多なるために、これを革命以前のロシア文壇に比べて、觀察評論の上に遙かに困難を増したともいへる。

文學索引の中にわづかにその名を留めてゐるに過ぎない程度の人々は別としても、この嵐の時代に現はれた新しい人々をその正しい位地に置いて見るといふことは、今のやうに周囲の事情もその人自身の姿も動き變りやすい場合に於いては、想像以上に困難であるといはねばならぬ。

一 昨年暮に近いことであつた。モスクワの國立藝術科學研究所の社會學部と文學部との聯合研究會で、リヲフ・ロガチューフスキーといふ批評家が、『無産階級文學の危機』といふ題目で、前後一時間半ばかりに互つて意見を發表したことがある。そのあとで、例によつて聞き手の中からいろいろその意見に對して批評が加へられたのであるが、要するに、謂はゆる危機は初めから存在しないといふのと、危機は既に過ぎ去つたといふのと、二つの見解に分れたのである。リヲフ・ロガチューフスキーはもう五十を過ぎた人で、『最近ロシア文學史』その他いろいろの著述のある批評家であるが、書いたものと同じやうに、どこか順序の立たない、だらしないやうな考へかたがあるので、

その發表した意見そのものよりも、それを中心として加へられたいろいろの人の批評の方に、なかなかおもしろいのがあつたと記憶してゐる。

その中でも、私の明らかに記憶もしてゐれば、一つの鮮やかな印象を與へられたのは、詩人デラーシモフの批評であつた。

リヲフ・ロガチューフスキーの報告が終つて、十分ばかり休憩してから、批評を初めることになつて、司會者のアクセリロド夫人(ブレハーフと親しかつた古いマルクシスト)が、どなたか御批評はありませんかといふと、直ぐその夫人のうしろの方から口を切つたのがデラーシモフであつた。彼はもと勞働者の出身だが、長く亡命してパリにゐたりしただけであつて、逞しい體格にもどこか垢抜けのしたところがあり、蒼い色のシャツなども、何となく意氣に見えた。彼は極めて眞面目な、少し憂鬱な顔つきで、批評といふよりも、一つの感想を述べたのである。その言葉は齒切れがよく、はつきりしてゐた。

デラーシモフは今のサキエート・ロシヤの文壇を一つの家にたとへた。その家には三階まである。最上層には時の權威と結び、その特別の保護を受けて、文學の支配を行はうとする青年の群が住んでゐる。第二階には、その最上層に住む人々と親しくすることによつて、幾らかの餘澤に分け與か

らうとする人々が住んでゐる。最下層には、失望落膽した人々が、二階三階の人々とともに交遊する興味もなく心ならずも悲しみ匿れてゐる。彼等は花やかな希望を革命にかけてゐたが、新経済政策の實施とともに、町の飾り窓にはいろいろの商品の並べられるやうになるのを見て、革命を見失つてしまつた。二階の人々は、また同じく革命を見失つてゐるのだが、それを明らさまに言ふことを憚つて、最上層の人々が、革命は吾等の手に在ると呼んでゐるのを半ばは信じようとし半ばは疑ひながら、全く思ひ切りもし得ないでゐる。最上層の人々こそ、いつまでも革命はわが手中に在りと信じて歡呼してゐる樂天家である。サキエート・ロシヤの文壇はこの三層の家の如きものであると自分には思はれる……。

ゲラーシモフはこれだけのことを言つてしまふと、そのまゝむつつりした顔で座に就いた。

ゲラーシモフは、千九百二十一年の新経済政策實施に反對した労働者の一團とともに、ロシヤ共産黨を脱した一人である。彼のこの感想は、言ふまでもなく自から最下層の一人とする意味で、あまりに切實に響く言葉であつた。その後もいろいろの會合で彼を見かけたが、本來さういふ人か

も知らないが、いつもむつつりとして、眞面目な沈んだ顔をしてゐた。彼の謂はゆる最上層に住む左翼の批評家たちは、彼は千九百二十一年の革命文學の危機とともに失はれた詩人であると言つてゐる。「凡てのものを吾等建て作らん」とうたつた往年のゲラーシモフの面影は勿論既くない。

ゲラーシモフの沈んだむつつりした顔を想ひ浮べると、同じやうに決して笑つたりにつこりしたりしないやうな顔はしてゐながら、どこかふてぶてしく、傍若無人で、どんなことがあつても平氣で、一切をつかみ取る力を持つてゐるといふやうな、鷲鳥のやうな感じを興へるのはマヤコフスキーである。同じ一昨年十二月の下旬、モスクワの記者クラブの二階で彼が新作の叙事詩「レーニン」を朗讀した折は、主として青年男女の群集が、人々の制止をも肯かずになだれ込み、彼の立つてゐる壇上の脚もとにまで躍まつて聽いた。彼は平氣な顔をして何の斷りもなく上着を脱ぎ、やがては胴着を脱ぎ、大汗になつて朗讀した。朗讀は前後四時間近くかゝつた。夜の十二時近くから聽衆の批評が初まり、彼はそれに對して一々鋭利な文句で當意即妙に應答し、大喝采を博した。初期の作のやうに、わざと粗野がつたりするところも少なくなり、諷刺の意味での道化じみたところ

もなくなり、たゞ一種のグロテスクな味ひ、すばりすばりと言つてのけるやうな諷刺が鋭く、眞に俗談平語の風格で、力強く、革命詩人らしいびくともしない樂天性が漲り、大衆の間を安心して潤歩するの趣きがあつて、詩も人間の風格も二つながら渾然たる感じを與へた。群小詩人の中に在つて、マヤコーフスキーこそ「社會の趣味に平手打ちを喰はした」革命の詩人といへるであらうと思はれたのである。同じく革命に参加した詩人として、マヤコーフスキーとゲラーシモフとは一つの對照を形づくる。(一五・二)

—了—

大正十五年十月三十日印刷
大正十五年十一月六日發行

(定價壹圓九拾錢)

◀ 論 評 學 文 ▶

著 作 者
發 行 者

片 上
佐 藤 義

亮 伸

發 行 所

新 潮

社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
九番番番

番二四七一(京東)發振

印 刷 所

東京市小石川區四江戶町
電話小石川五九一番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

坪内逍遙氏序 日高只一氏著

■英米文藝印象記

新四六判布裝
三百八十頁
價貳圓貳拾錢
郵送料拾錢

質實なる學究の精神に、豐潤なる詩人の情緒をあざなひつゝ、英米文學の眞髓を其の深遠なる學識と、親しく耳聞目睹せる印象との兩方面より説けるもの。或はエマルソンの跡を尋ね、或はハアデイの家を訪ひ、或はボオを品し、或はコンラッドを論ず。精彩なる近代英米文學論と英米遊記とを兼ねる此書は、英米文學まさに盛んなるの時に愛讀せらる可きを信ずる。(挿畫五十數面)

吉江喬松氏著

■佛蘭西文藝印象記

四六判布裝
三百八十頁
定價貳圓
郵送料拾錢

吉江氏曩に佛蘭西に遊んで其風物に親み其文藝を究むる事數年。これ等の印象を叙して此の一卷を編む。實にこれ身を以て佛蘭西を讀みたる人の一大批評であり、人類生活最高の指標たる佛蘭西精神の深刻なる解剖である。「ポール・ロワイヤアル訪問」「ヴェルサイユ」以下十數篇。或は歴史を説き、或は文藝を語り、其視野は飽く迄も廣く、其興味は飽く迄も多角に、而して其研究と考察は、わが日本現代の生活を背景とし規準とすることを忘れない。而もこれを貫ぬくに氏獨特の詩人的情懷を以てし、流麗の筆、時に全篇悉く詩なるを思はしめるものである。外遊印象記の類、數甚だ多いが、其含蓄と風格と本書の如きは斷じて匹儔を見ない。

岸田國士氏著

■我等の劇場

菊池 寛氏序
山本有三氏序

四六版布裝
三百三十頁
定價貳圓
郵送料拾錢

岸田氏は、菊池氏の謂ゆる「戯曲及び演劇に關する學識に於て當代第一流の人」である。氏が佛蘭西より歸るや我が劇界の面目頓に改まるの概があつた。その創作は云はずもあり、作を裏づくるの論議亦、豊富なる智識を背景とせる考察の深さと廣さに於て「日本の初めて得たる演劇學者」として推稱せらるゝに至つた。今、其最も高名なる「我等の劇場」、「演劇一般講話」等の諸名篇を中心に、折々の劇評等をも加へてこの一卷とした。正に混沌たる劇場の闇を破る燈明臺とも云ふべき書である。

木村 毅氏著

■文藝東西南北

内田魯庵・菊池 寛
吉野作造三氏序

新四六版布裝
三百六十頁
定價壹圓八拾錢
郵送料拾錢

明治大正の文學を新しき見方の下に精到なる觀察をなし、是を隨筆的興味多き讀物とせるもの、總べて二十篇。「何人にも面白く讀めるだらう。そして讀後にはかなりな文學通になつたやうな氣がするだらう」とは著者自らの語る所。中で「雜學問答」「翻譯雜考」等は蘇峯學人や吉野博士、新村博士の注目を得たもの。「水平文獻」の研究、は一部の水平社同人から感謝を贈られた。「モダン・ガール論」では新しき女性を憤慨させたが「モテル考」の如きは文學青年をして翌朝の新聞を待兼させた者である。

◇書叢說小會社◇

ボグダノフ著
大宅壯一氏譯
(1) 赤い星

新四六判紙装▼壹圓參拾錢
紙數三百頁▼郵送料六錢

ピエルアンブ著
内田傳一氏譯
(2) 軌道

新四六判紙装▼壹圓五拾錢
紙數三百六十頁▼郵送料八錢

ピリニヤーク著
富士辰馬氏譯
(3) 裸の年

新四六判紙装▼壹圓五拾錢
紙數三百四十頁▼郵送料八錢

マルクスの流れを汲む經濟學者で、勞農ロシアの經濟委員長であつたボグダノフが書いたユートピアである。インテリゲンチヤから革命運動に身を投じた勇敢なる青年闘士が地球の星をたると「赤い星」即ち完全に社會主義化した火星に赴き、其處で何を見出し、どんな行動を演じたか。次から次へと奇想天外的な事件を展開させて行く豊富な想像力と、多方面に互る正確な科學的知識と、寸分の隙も見せない創作的手腕とは、唯々驚嘆する外はない。

アンブは、生粋の勞働者から身を起した典型的の無産派藝術家で、此作は彼が鐵道従業員としての實際經驗に材を取つたものである。勞働苦の讚美。勞働愛の高揚。彼の精神はこゝに盡きる。彼が勞働こそ人類幸福の源泉であり、社會改造の鍵であるとの信念から書いた此「軌道」一篇は實に勞働の福音書とも云ふ可きで、此の作の世に問はんとする所は、獨り此の作の藝術的價值に於てではない。これこそ人生そのものとも云ふべき作品である。

一九一九年のロシアは、内亂と飢饉と童扶斯の眞ッ暗な年であつた。この恐ろしい闇黒の裡に奮めくロシア人を、ロシアのあらゆる階級を生地の儘に描いたもので、此作こそ實にピリニヤークを文壇の頂上へ押上げた代表作である。そこには、滅び行く者の消息がある。獸のやうになつた農民がある。闇と饑餓の中に素つ裸となつた愛慾がある。それらの一切が、世にも清新な、世にも獨特な筆觸とスタイルとを以て描き盡くされてゐる。

生田長江氏譯
ニイチエ全集

□第一編 人間的な餘りに人間的な(上) 定價貳圓五拾錢 送料拾八錢

□第二編 人間的な餘りに人間的な(下) 同

□第三編 黎 明 同

□第四編 悦ばしき智識 同

□第五編 ツアラトウストラ 定價貳圓八拾錢 送料拾八錢

□第六編 善惡の彼岸。道德系譜學 同

□第七編 權力への意志 (全二冊) 定價貳圓五拾錢 送料拾六錢

■ツアラトウストラ解釋並に批評 阿部次郎氏著

— 定價壹圓貳拾錢、郵送料八錢 —

思想・文藝・講話叢書

四六版總洋布・紙數約五百頁
價貳圓五拾錢・郵送料拾貳錢
但(一)は貳圓(三)は貳圓參
拾錢(四)は貳圓(十二)參圓五拾錢

(1) 近代思想十六講	中澤 臨川著	(11) 東洋思想十六講	高須芳次郎著
(2) 社會問題十二講	生田 久雄著	(12) 歐洲繪畫十二講	伊達俊光著
(3) 近代文藝十二講	生田長江・森田草平 野上白川・昇曙夢	(13) マルクス十二講	高島素之著
(4) 近代劇十二講	楠山 正雄著	(14) トルストイ十二講	昇 曙夢著
(5) 改造思想十二講	宮島新三郎著 相田隆太郎著	(15) 東洋文藝十六講	高須芳次郎著
(6) 本日近世文學十二講	高須芳次郎著	(16) 獨逸文學十二講	三井光彌著
(7) 本日現代文學十二講	高須芳次郎著	(17) 進化思想十二講	小栗慶太郎著
(8) 小說研究十六講	木村 毅著	(18) 經濟思想十二講	安倍浩著
(9) 婦人問題十六講	奥 うめお著	(19) 世界宗教十六講	相田隆太郎著 木村 毅著
(10) 社會學十二講	杉山 榮著		

以下 續々 刊行

517
521

2年3月22日

中野	中野	中野	中野	中野	奥田	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野

讀書

終